

祭典作業畧式 全

207

東京圖書館			
一	二	三	四
七	號	架	西
門	類	函	架

014065-000-3

1-207

祭典作業略式

鈴木 信比古 (愛知県県社
以下神職取締所生徒寮) / 刊

M28

ABB-0321

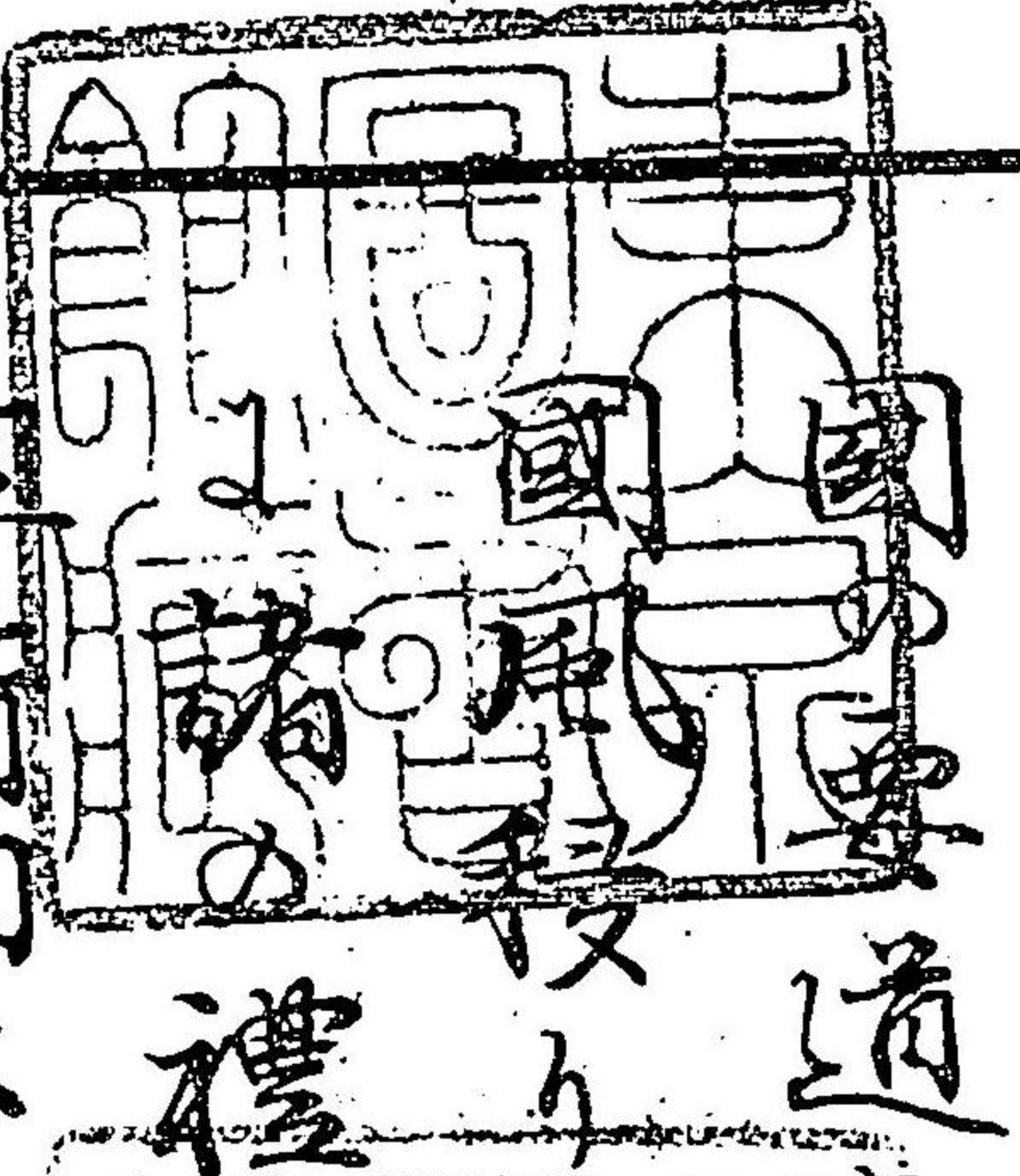


愛知縣立女子師範学校

大正十一年四月新編

明治廿八年四月新編

我神國ハ古代外亞より禮義國と稱して天上の儀たるゆゑわがわがを以て治



國の要道とるに於て中古支那印度の國風を授けりて其の禮義の成は今の世に

祖河田大人賀茂大人本居大人平田大人の

教よりて後の世よりて讀得る事とるれり
いはいとむむの今その書等に

愛知縣縣社以下神職取締所生徒寮編纂

祭典儀式略式全

明治廿八年四月新鐫

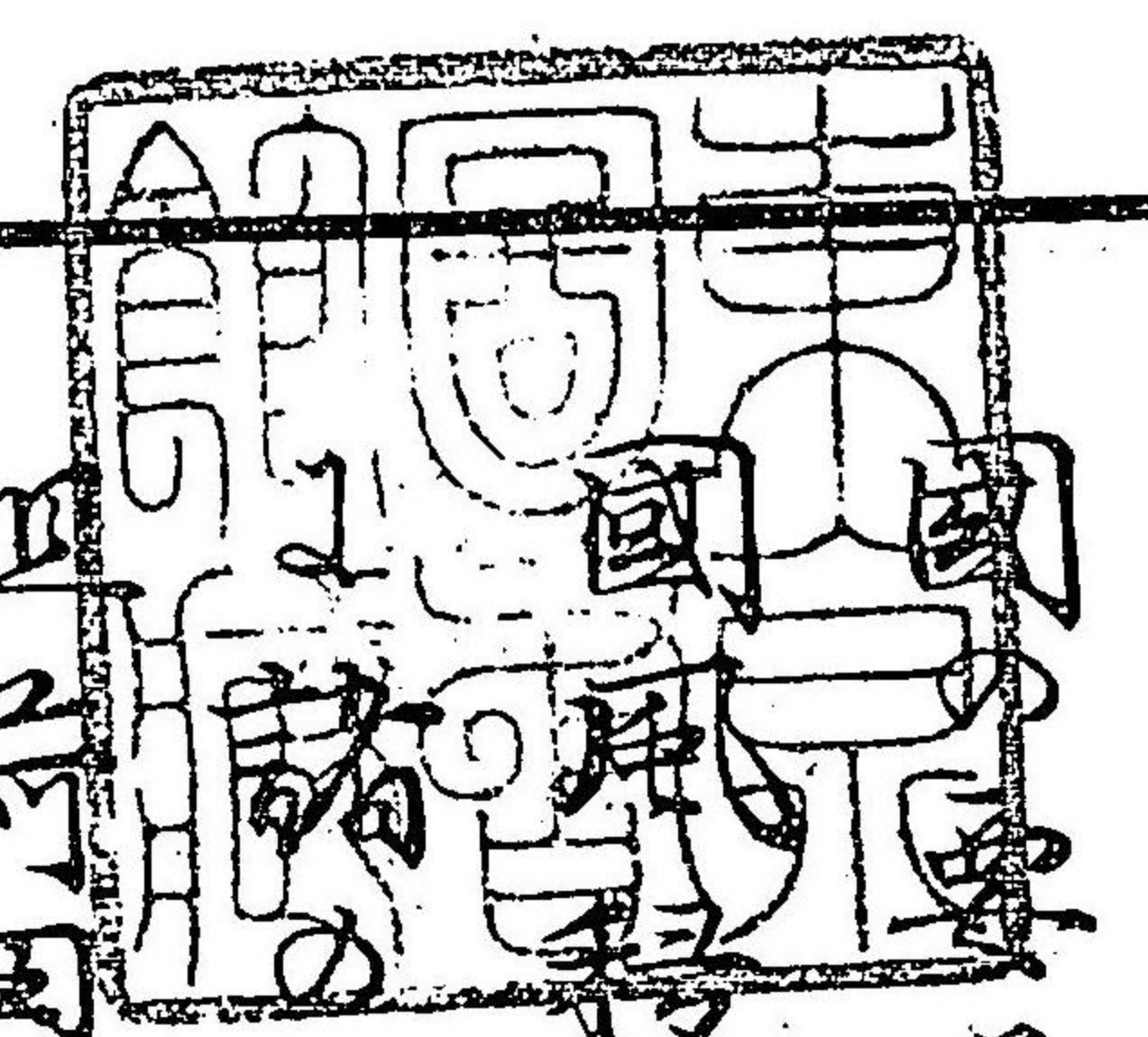
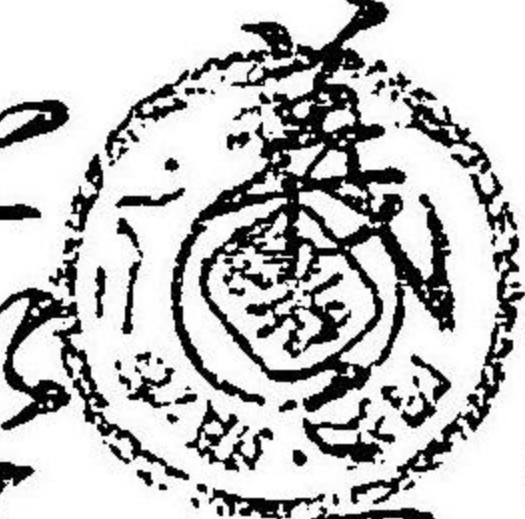
我神國ハ古代外亞より禮義之國と稱して天上の儀たるものやわざを以て治國の要道とる。殆り中古支那印度の國風殺り來りしと禮義の本は今のところ諸の禮典に傳はれりその書等よ學祖荷田大人賀茂大人本居大人平田大人の教よりて後の世よりて讀得る事とされり。いはいとむむのし今その書等にすむる

皇極經世一書

皇極經世一書

皇極經世一書

我神國ハ古代外亞よりと禮義國と稱して天上の儀たるわやわざを以て治



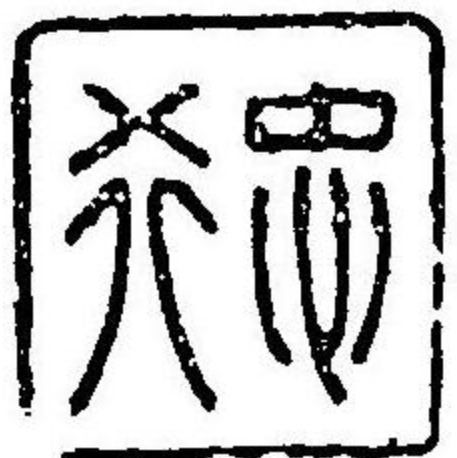
國の東道より中古支那印度の國風授り來りて禮義の本は今のとて諸の禮典に傳はりその書等よ學祖河田大人賀茂大人本居大人平田大人の教よりて後の世よりと續得る事とされり

いはいとむの今その書等にすまひ

熱田神宮に行かせ給へる作法よりの
畧式を物しつゝなりむ

明治二十八年三月

禮典會長正六位南田忠行



祭典作業略式

庭上被式

先づ社頭便宜の所に被所を設け神籬と立つ第一回津の真



に案を置き大麻第二回塩水第三回を設け置べし第四回
次齋主以下被所神前の右の方我左に列立正笏して一
揖す但中略持地方官吏初は被所神前左の方に列立し

一揖す

次被主神籬の前に進み祝詞を白す

其儀被主一揖して神前に進み正笏して一揖し再拝して

笏を懐中し拍手して右の手を懐中に入れ祝詞を取出し
少し^は左の方にて開き正面に直し奉讀し終て又少し左
の方にて巻き納め右の手にて懐中し笏を取り正笏して
再拝し又笏を懐中し拍手して笏を取り正笏して一揖し
退きて復列し一揖す

次大麻行事

其儀行事者一揖して神前に進み一拝して豫て大麻の設
けある案前に至り笏を懐中し^{に又は適宜の所}大麻を取り
^{我左の方と上との如し}先づ右の方^し齊主の列^{なり}但
^{と下とす}五^四の^{如し}方^し齊主の列^{なり}但
^{の方よりあらば}左^のに^{至り}一揖して立ながら持かへ右左右

と拂ひ次に左の列に至り一揖して大麻と持るへ左右左
と拂ひ一揖して退き大麻は場外へ放棄して^吃大麻と受^取
置^人設^け復列して一揖す

但齋主以下大麻行事者一揖する時は必答揖すべし拂
ひ方は各自拂ふべきなれども其煩ひと省き多人數な
らば四五人宛適宜拂ふをらしとす

次塩水行事

其儀行事者神前へ進み方すべて大麻行事者に同じ塩器
を両手に持ち^持方^六先づ右の方^に至り一揖して左
の手にて塩器と持ち右の手にて櫛の小枝と持ち左右左

とそ、ぐなり其他復列迄の順序はすべて大麻行事者に
同じ

次退出

其儀齋主以下一同一揖し順次祭場へ進むべし

祭式

先齋主以下祭場に着座す

其儀齋主以下神前の右の方我方左に着坐し正笏一揖し

笏は前に置く下皆参列者は神前の左の方に着坐し一揖

す

次開扉

其儀後取者一揖して立ち御鍵を持ち持ち方齋主又

は副齋主の前に坐し一揖して御鍵と持直して渡すべし

齋主又は副齋主は一揖して之を笏に取り添持ち方ハ

一揖して立ち神殿の階下右の方我方左へ進み一揖して斜

になりて階に昇り我方右に進み一揖し御鍵を以て御鍵を

開け先両手にて左の御戸を静最も静に開き終て一揖

御戸の右の方我方左へ膝行して御戸を静最も静に開き終て一揖

始の如く階と下り一揖して復坐一揖す

但御鍵御錠は殿上適宜の所と見計ひ置べし

三

次神饌を供す

其儀神饌長一揖して坐と立ち神殿の階下右の方我方左に進み一揖して昇階し一揖昇階の時状は如す殿上神前右の方我方左に蹲り居るべし

次神饌次長一揖して坐を立ち進むおと神饌長に同じ但し階の中間若し階ひくければ階下に踞き居るべし

次傳供者何れも一揖して立ち次第に進み左右斜に相對して兩列に踞き但又負の多少之神殿と神饌所との距離を要す終ると見て神饌長笏と懷中し覆面す之と見て神饌次長以下何れも笏と懷中覆面し列立すべし後取者神饌

所より神饌と繰出し順次傳供す三宝の持方次第傳供終れば末坐の者より踞き覆面と外し笏と懷中より取り一揖して復坐し一揖す神饌次長は階の中間ながら一揖して降階し階下にて一揖復坐して一揖す神饌長は一同の復すと見一揖して降階し降階の時状階下にて一揖復坐して一揖す

但傳供長は神饌供ふる毎に必ず一揖すべし神饌献供の順序は第十圖の如し

次齋主祝詞と白す

其儀齋主一揖して坐と立ち神前に進み一揖し殿上の昇ら

時^降開^扉如^の豫^て設^けあ^る軾^に坐^し一^揖して再^拜拍^手一^段
終^て右^の手^にて懷^中の祝^詞と取^出し左^の方^にて開^き正
面^に直^し最^も謹^肅して奉^讀すべし終^て又^左の方^にて卷
き納^め右^の手^にて懷^中し笏^と取^り再^拜拍^手一^段終^て一
揖^し復^坐一^揖す
次^玉串^案と置^く
其^儀後^取者^玉串^案と持^ち持^れ右^方玉^串案^の下^へ左^端の^持添^と入
四^の如^芽計^一神^前に進^み階^下に置^き一^揖して復^坐し一^揖
す
次^玉串^と奉^る

其^儀齋^主或^は副^齋主^一揖^{して}後^取者^玉串^持四^の如^芽十^{より}
玉^串と請^取り笏^に持^添へ一^揖して坐^と立^ち持^方如^芽十^三
す^上は軾^に坐^し玉^串と持^なが^ら一^揖し玉^串の^本の方^と
神^前の方^にして案^上に奉^り芽^如計^四一^揖して退^き神^前
に正^面して着^坐す副^齋主^は次^坐の^者より^は漸^次豫^て設^け
の^芽如^計五^回玉^串と自^ら取^りて案^上に奉^り主^奉る^状は^齋
な^おと退^きて齋^主副^齋主^の後^ろ左^の方^{より}一^列に着^坐す
べし着^坐し終^りて齋^主始^め一^同に再^拜拍^手兩^段し末^坐
より次^芽に本^坐に復^し各^一揖^す
但^又少^の時^は齋^主初^一列^に着^坐すべし

附齋主のみ玉串と奉る時は祝詞の前に一拝し玉串と奉り再拝拍手一段祝詞奉讀再拝拍手一段畢て本坐に復し一揖す次坐の者よりは漸次神前に進み一列に着坐し再拝拍手兩段し畢て末坐より本坐に復し一揖す次玉串案と撤す

其儀撤するおと置く時の如し

次神饌と撤す

其儀撤し方後に備へたる品より順次に撤す終て末坐より本坐に復し一揖す

次閉扉

其儀開扉の時の如し

次直會

其儀直會は拜殿或は社頭便宜の所に豫て設け置くべし

直會の次第

先各負着坐

次齋主の前に饗膳と据る饗膳の如し十六

但参列の内齋主より高官あらば齋主と次にすべし

次順次饗膳と据るおと前の如し

次配膳者一人は人執子と執る一齋主の前に進み初献と勸む

齋主拍手一つ之と執て飲み配膳者に附す以下勸盃の次

第之に同じ

次配膳者二献を齋主に勸む以下初献も同じ

次饗膳と末坐より撤す

次退出

其儀一揖して齋主より退出すべし

祭式に奏樂と用ふる時は開扉神饌献撤の時に奏すべし倭舞式正神樂等は各玉串と献じて復坐の後にすべし右は普通の祭典式なれば古の法式に遵ふは勿論なれ共或は其神社旧来の古式あり又神殿の構造祭場の模様により必しも此祭式の順序に行ひ難き場合なきにあらず

そは齋官於て注意適宜に執行すべきものと心得べし

拜殿等にて被式

先拜殿便宜の所に軾又は円坐を設け置き被主祝詞の坐とす

次被所神前右の方に大麻塩水を机上に置く

次祝詞の坐より少し下りて神前右の方に齋主以下の円坐を人数ほど設くべし参列者あらば左の方に同様設くべし

但荒薦ばかり小てもよし

齋主以下被所に列坐一揖す

右の外すべて庭上式に異ならず故小畧す

但大麻塩水行事者は立ながら拂ふべし

祭式作法

笏 中啓も同じ

笏は平常右の手にて右の脇腰より少し腰の上の位小直立に持つものなり第七四神前等に向ひ正笏するとき

は両手小て持指末の裏に左は右笏の表二本を重ねるなり第十

八四の臍のあたりへ當つるを言ふ

揖

揖とは正笏し臍のあたりへ當て腰を折るなり拜ふ似た

りと雖ども大差あり誤る可らず

拜

拜とは正しく立て正笏し面前まで上げて先づ右の足を引て跪き次小左の足を引て坐するなり立時は左の足より立つべし進む時も左の足より始むべしいづれも拜はみな同じまとなり右を先とする説もあれど仏法より移れるなり男左女右は上代の例なり

沓揖

沓揖とは沓を着る時又ぬぐ時小一揖するを言ふ即軼又は円坐の前小至り両手にて笏を持ち臍のあたりへ當て

て一揖して沓をぬぐ等なり

座揖

坐揖とは軾或は円座に坐し一揖するを言ふすべて神前にては起居毎に必坐揖するものと心得べし

再拜

再拜とは軾或は円坐より立ち笏を両手ふて持ながら面前まであげて一拜し又立ちて笏を面前まであげて一拜するなり

再拜兩段又は兩段再拜も言へり

再拜兩段とは右の再拜を二度するふて四度立ち四度拜

するなり二度拜するを一段とす即再拜也

八拜

八拜とは四拜即再拜也と二度するなり

拍手

拍手とは手と拍つなり笏は坐禮の時は坐の前に置き立禮の時は懐中するなり

短手

短手とは音と立ずして拍つなり或は一度打つをも言へり

拍手兩段

拍手兩段とは手を四ツづゝ二度打つなり一四段ツ打つを
八拍手

八拍手とは手を八つ打ち短手一つ打ち之を二度するな
り合せて也

膝行

膝行とは膝ふて行ふとなりあるとき笏は右の手小持な
から行なり

拜小三様あり

一は畧式小して

先づ沓揖次坐揖次再拜次拍手次坐揖次沓揖なり

二は正式小して

先づ沓揖次坐揖次再拜兩段次拍手兩段次坐揖次沓揖な
り

三は別式小して伊勢神宮熱田神宮等ふて行ふ式なり

先沓揖次坐揖次八拜次八拍手次坐揖次沓揖なり

祝詞

祝詞はすべて懐中するものなり神幸の時に祝詞袋とい
ふものあるおとあり

供物

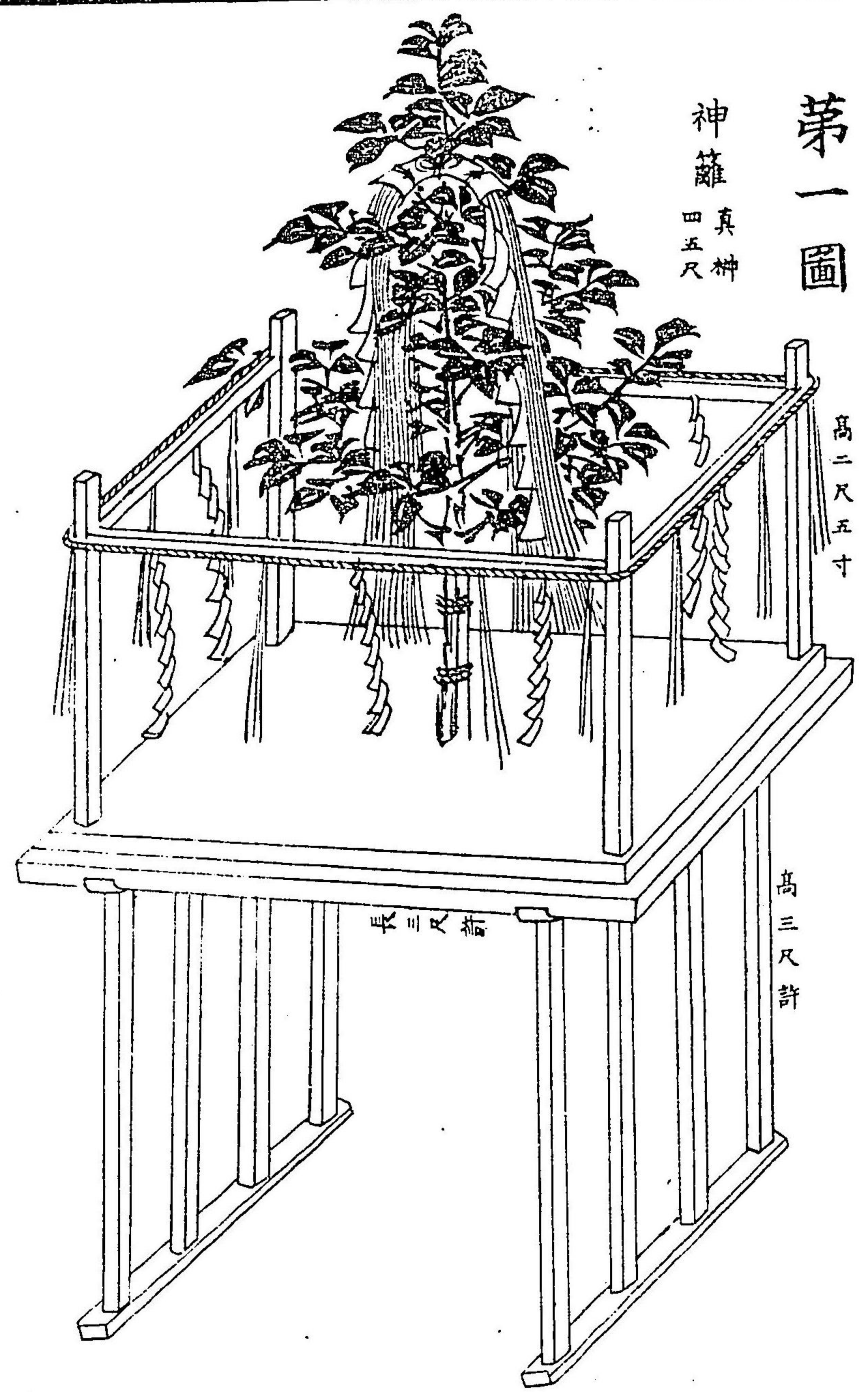
供物は高杯ならば左の手小て柄を握り右の手小てふち

をもちて次第に傳供す三宝ならば大母指を三宝のふち
の上にかかけ食指より以下小指までを三宝のふちの下小
入れ堅く持つべし手ふて直に奉る時は左の手を土器の
下へ入れ右の手を持添ふべし

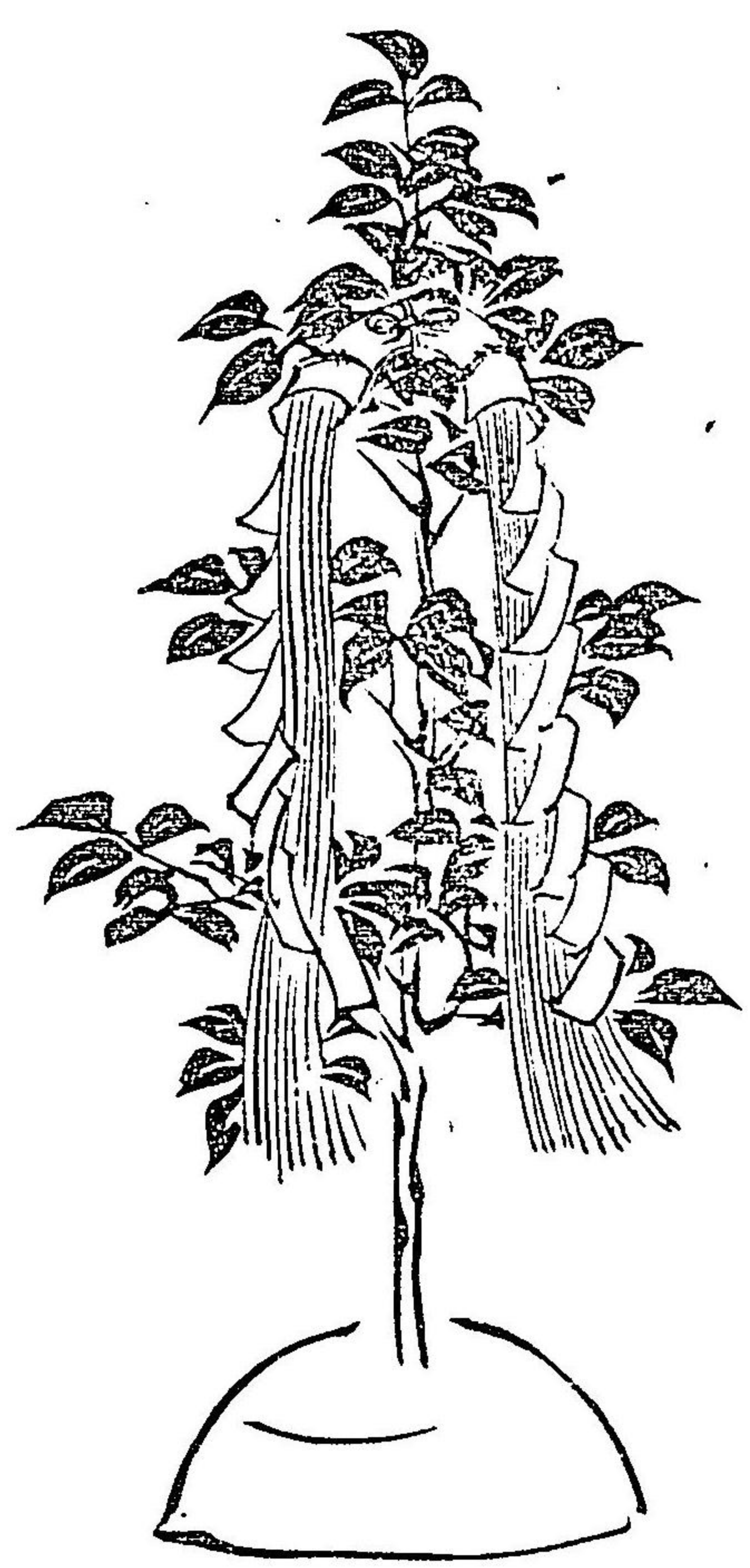
齋主心得

齋主の祭官中重任あるふとは申も更なり故に細心注意
周到ならざる可らず神前小在る時は容姿嚴肅誠心謹敬
なるを要すべし其他副齋主祓主大麻塩水行事者神饌長
初傳供者後取者小至るまで同じく恐敬を主とし心思を
清浄小し粗野の容態等決して為す可らず

第一圖



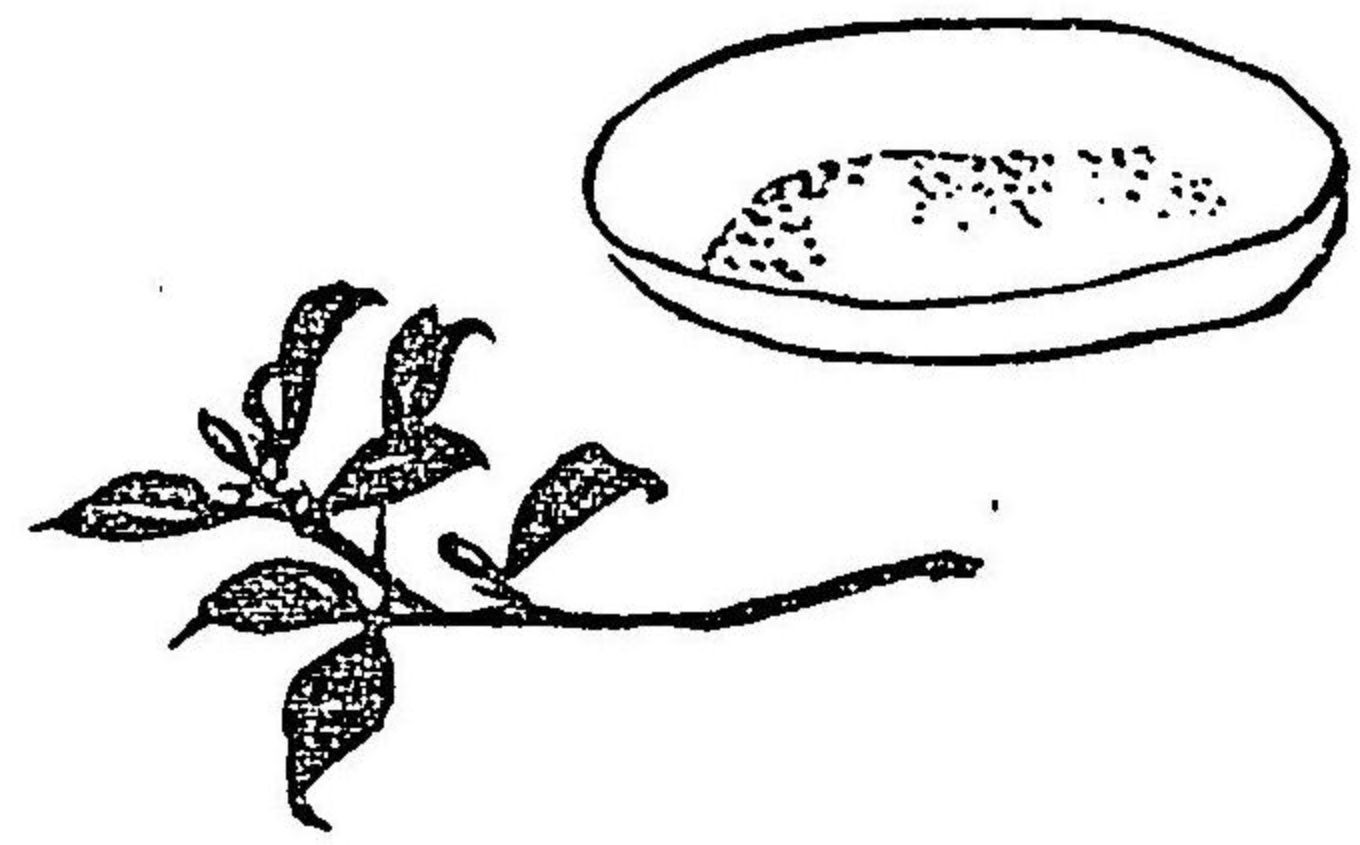
畧其
圖二



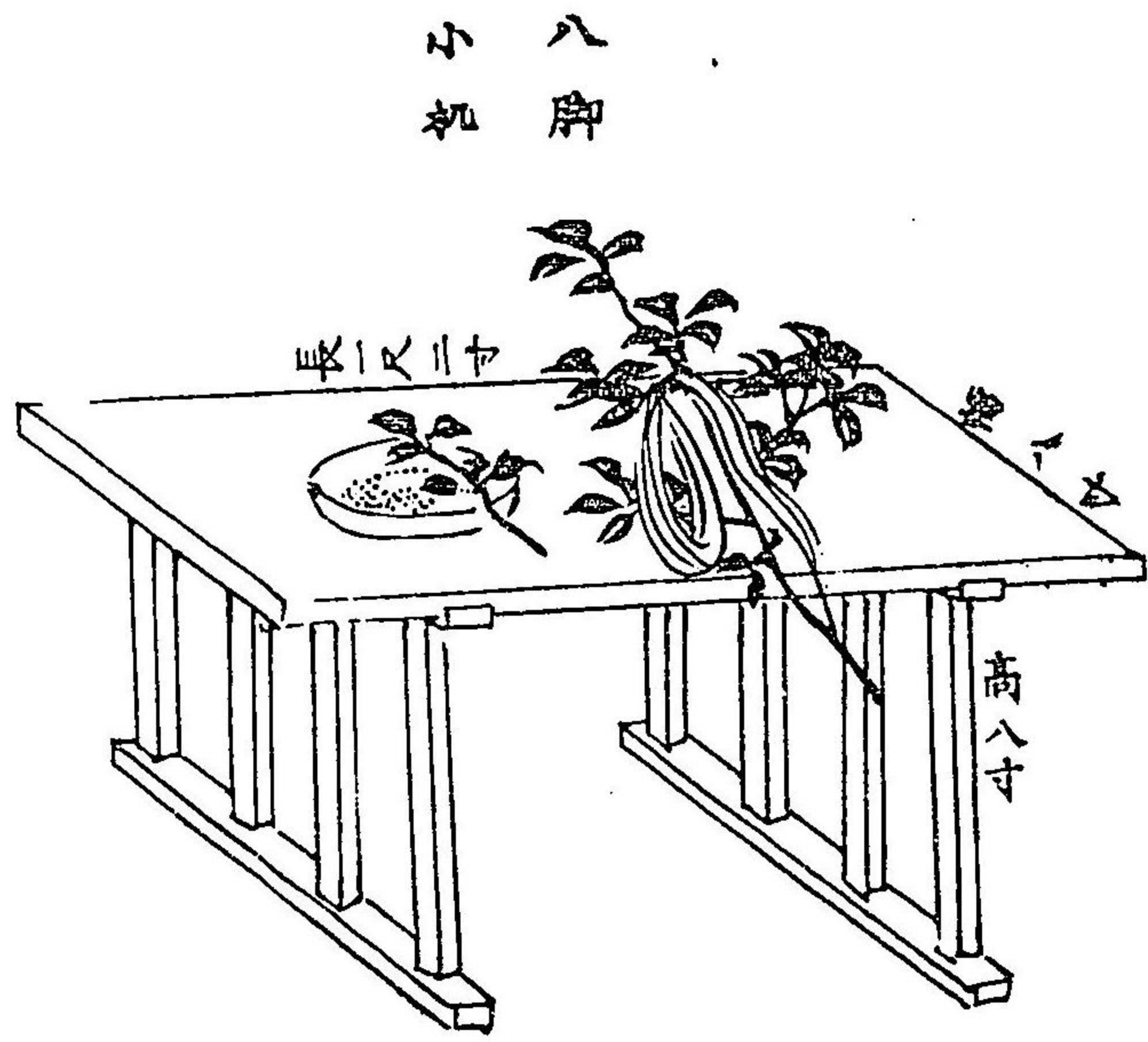
第二圖



第三圖



第四圖



第五圖



第六圖



第七圖



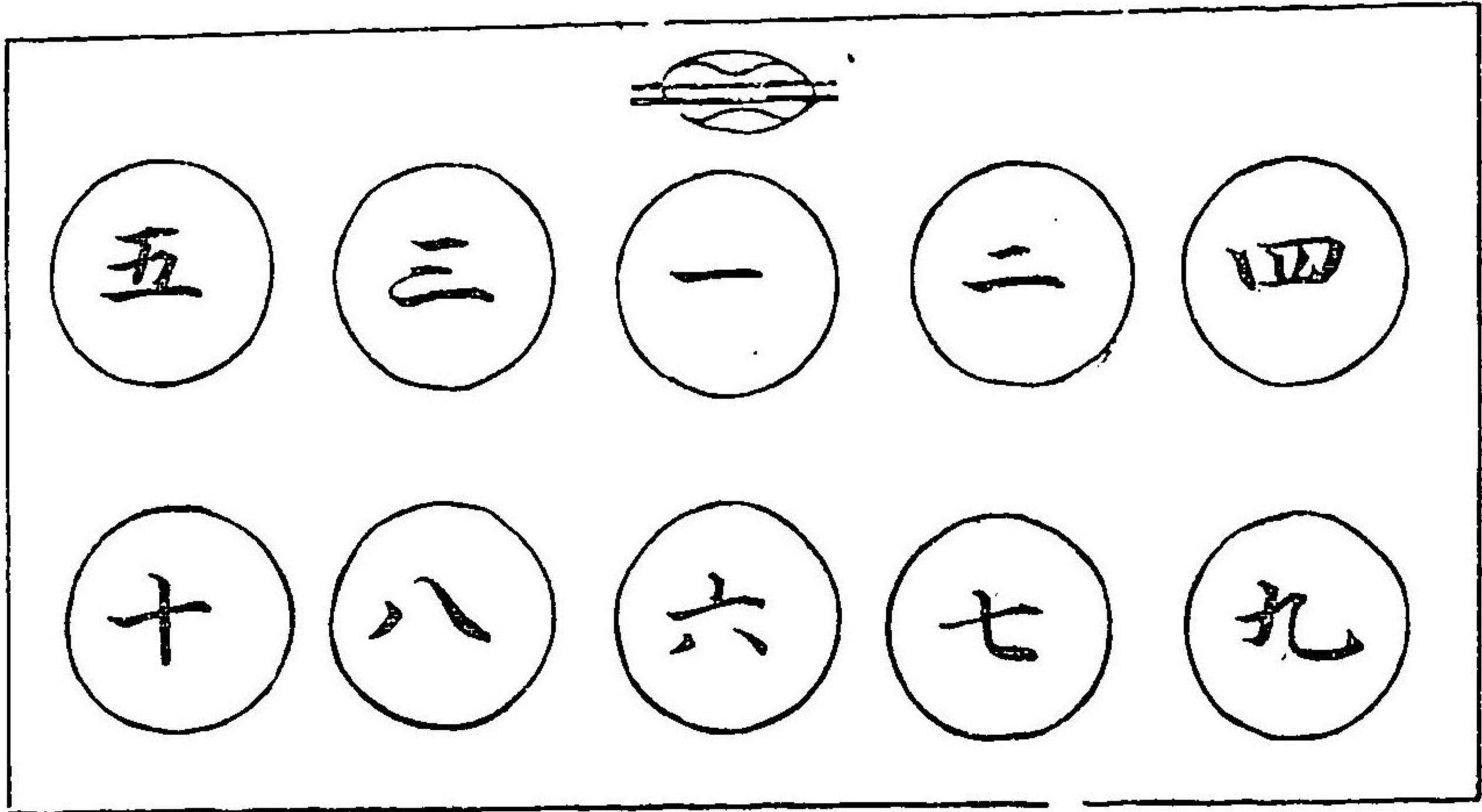
第八圖



第九圖

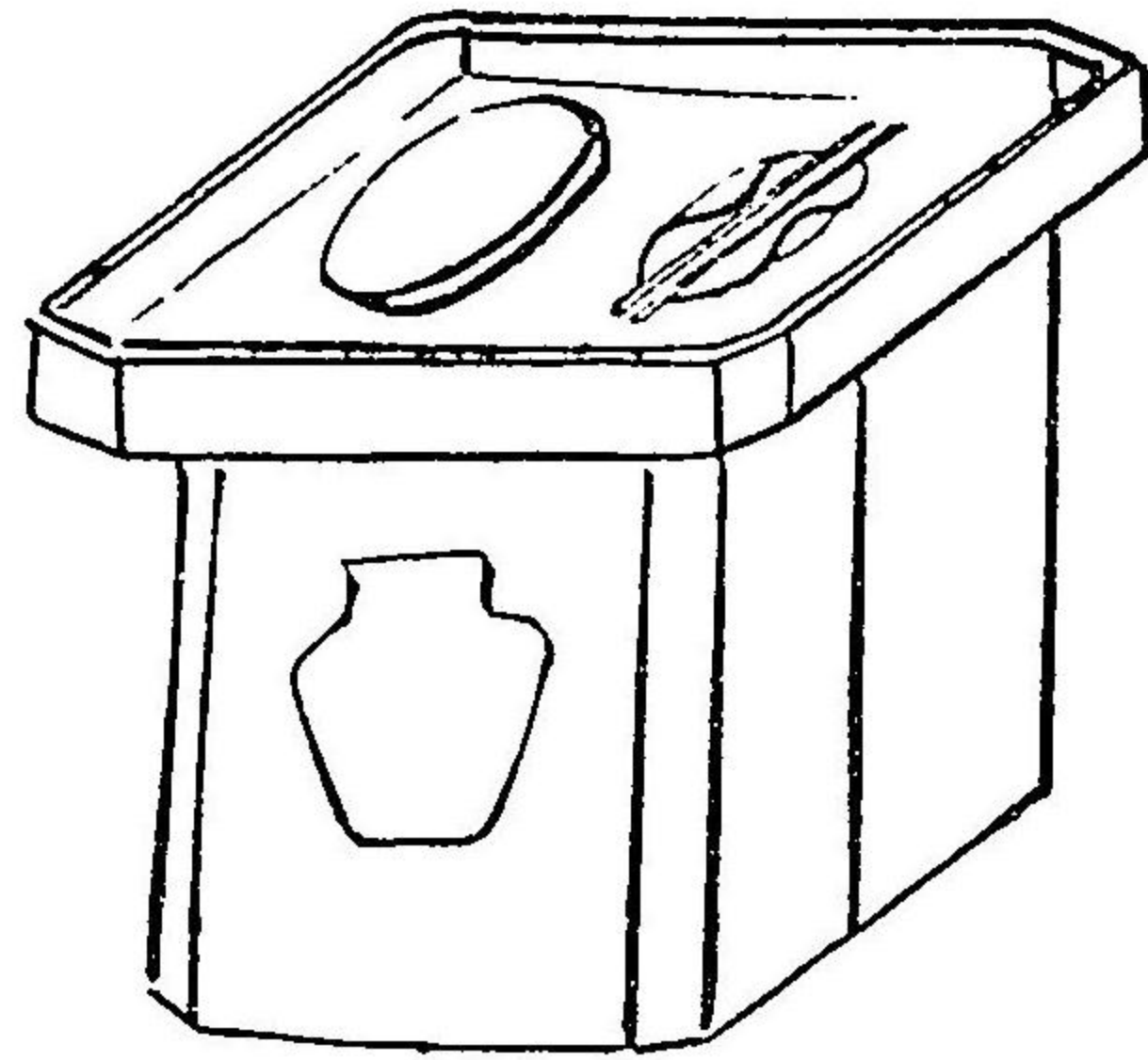


第十圖

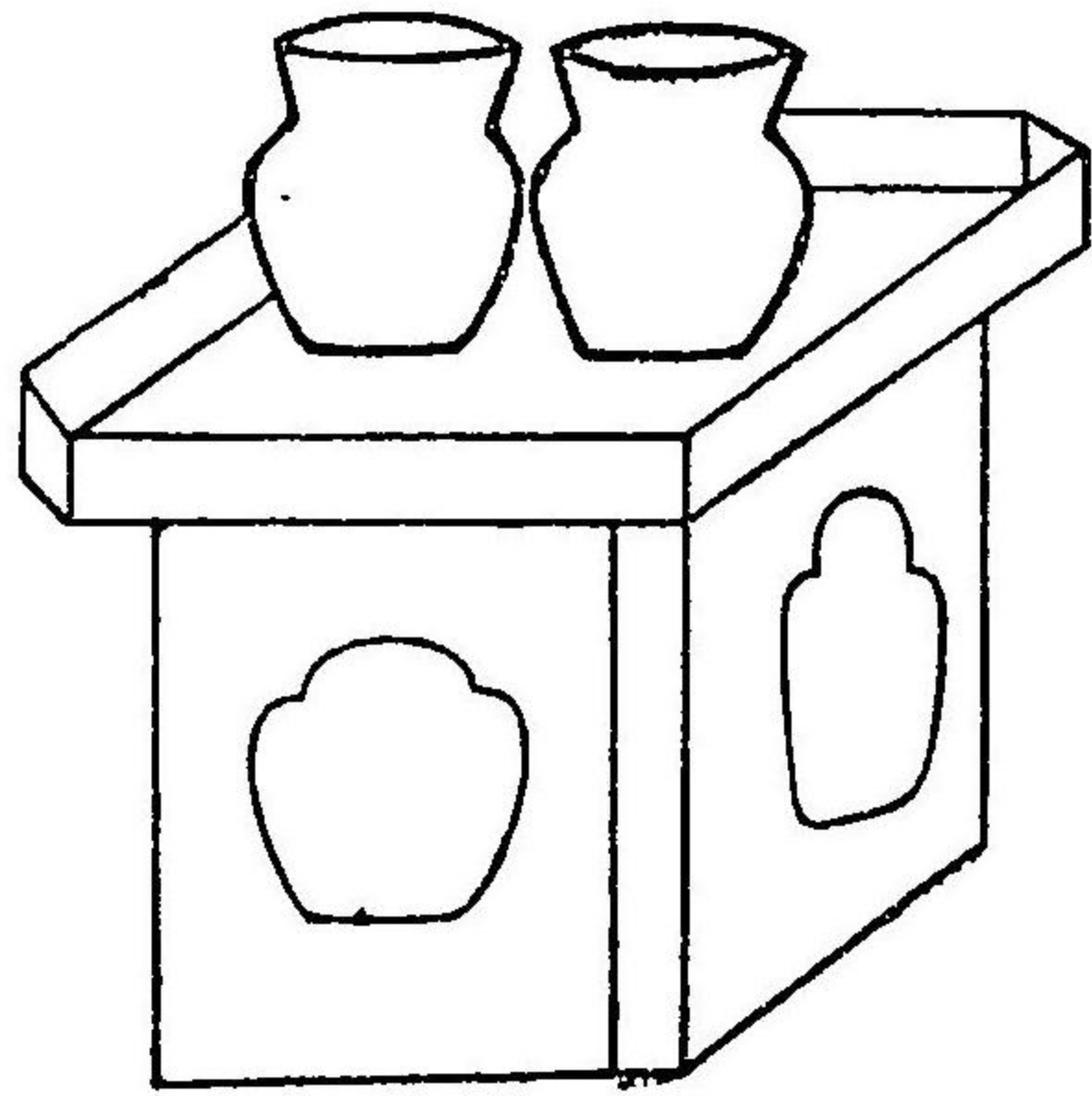


神饌一

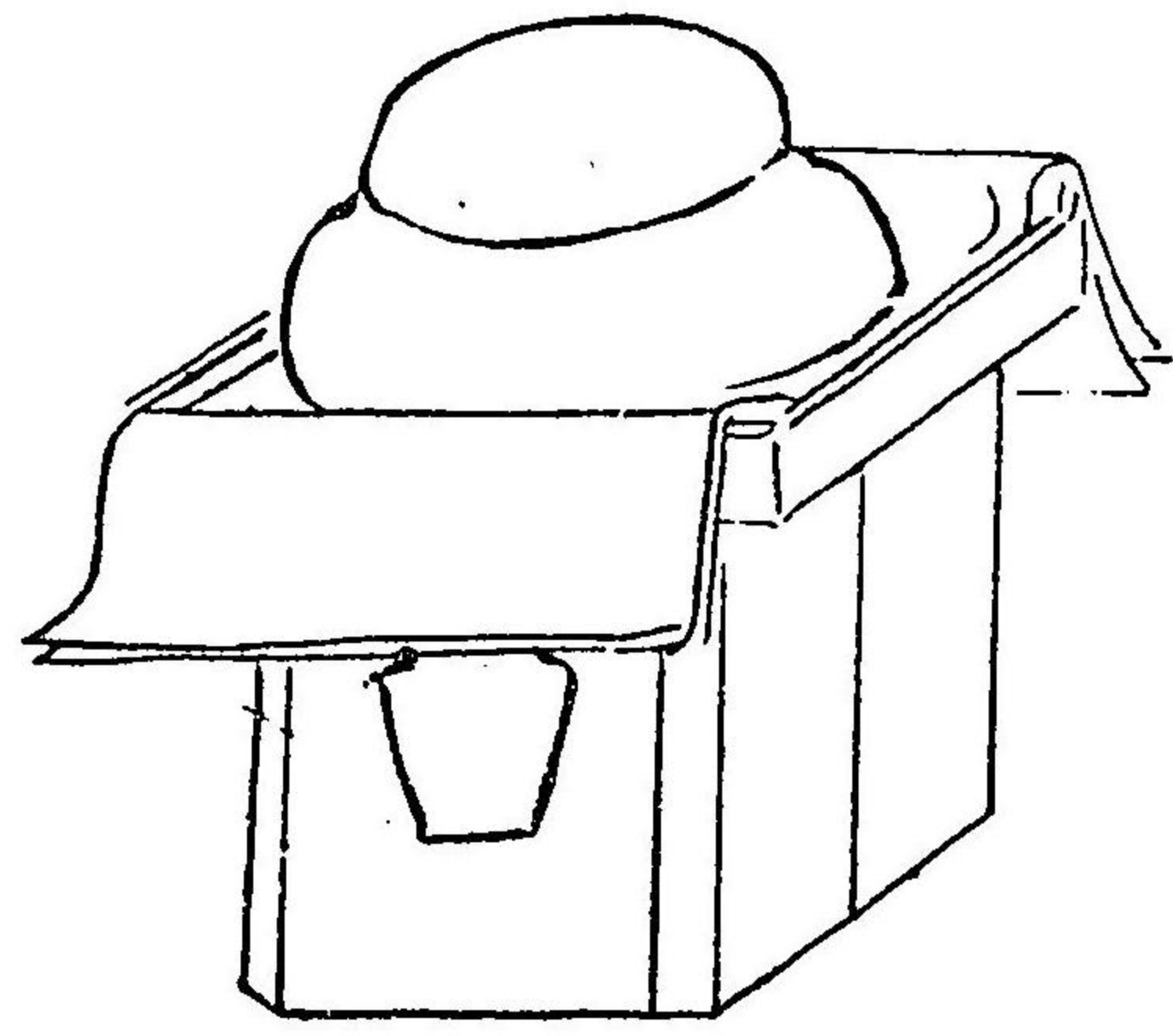
三方臺 一尺二寸
或八寸



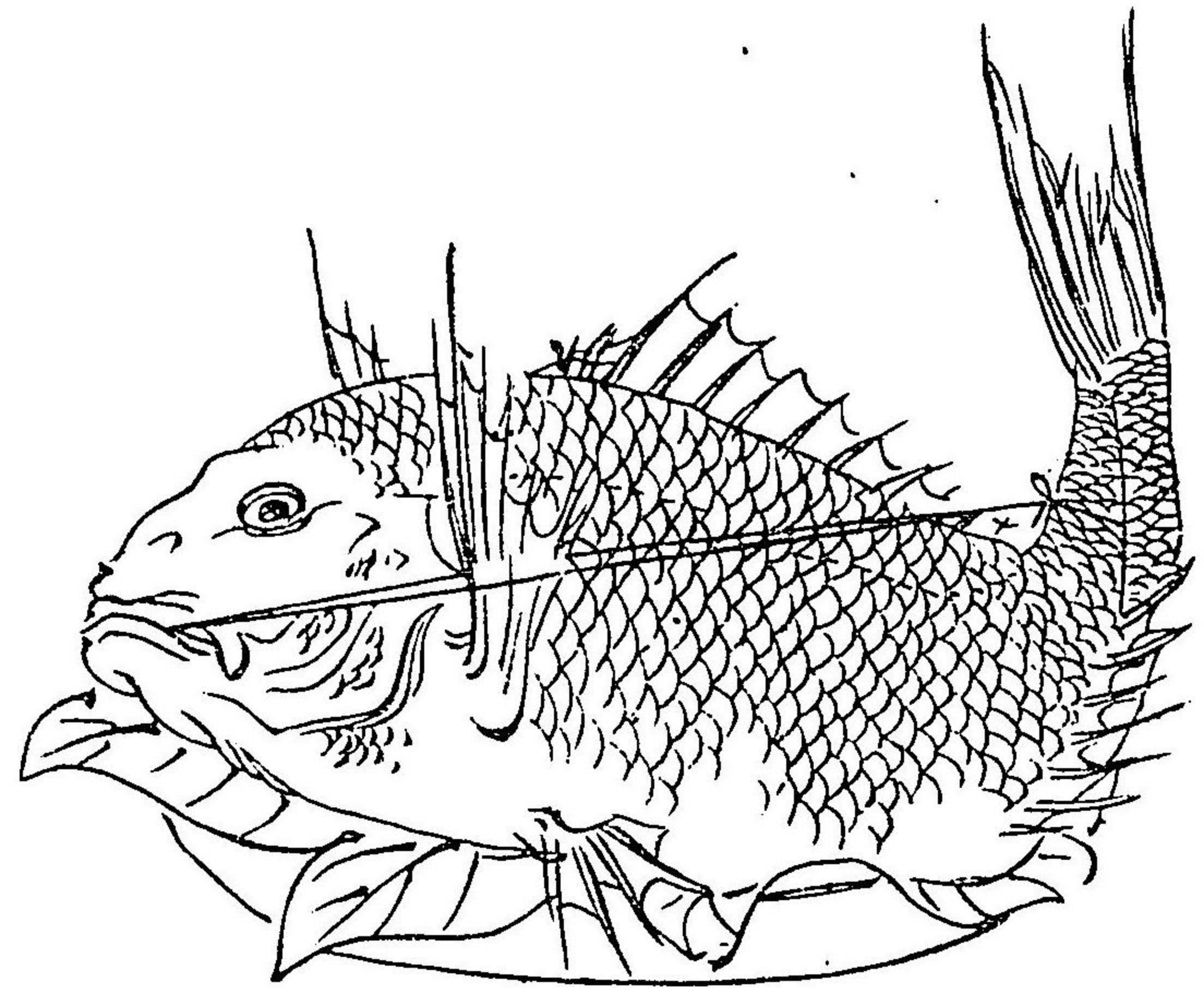
神饌二



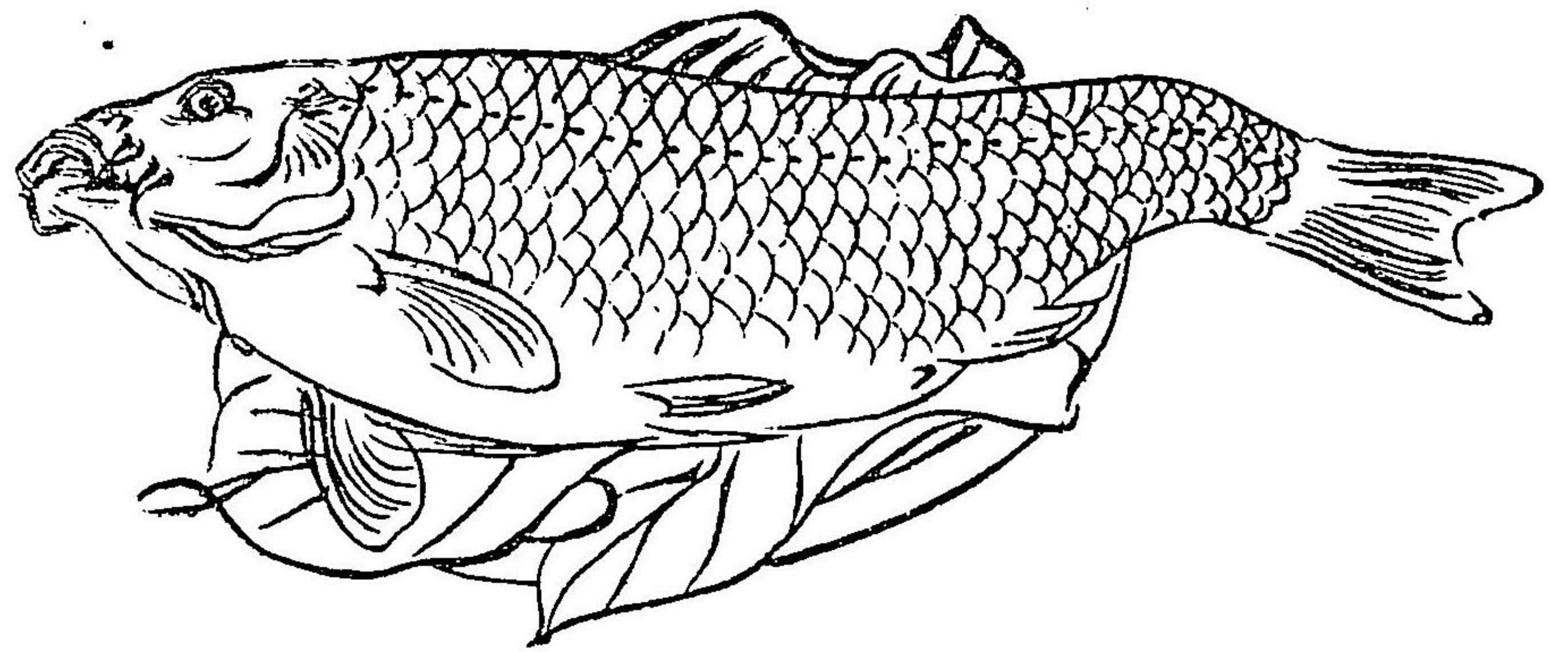
神饌三



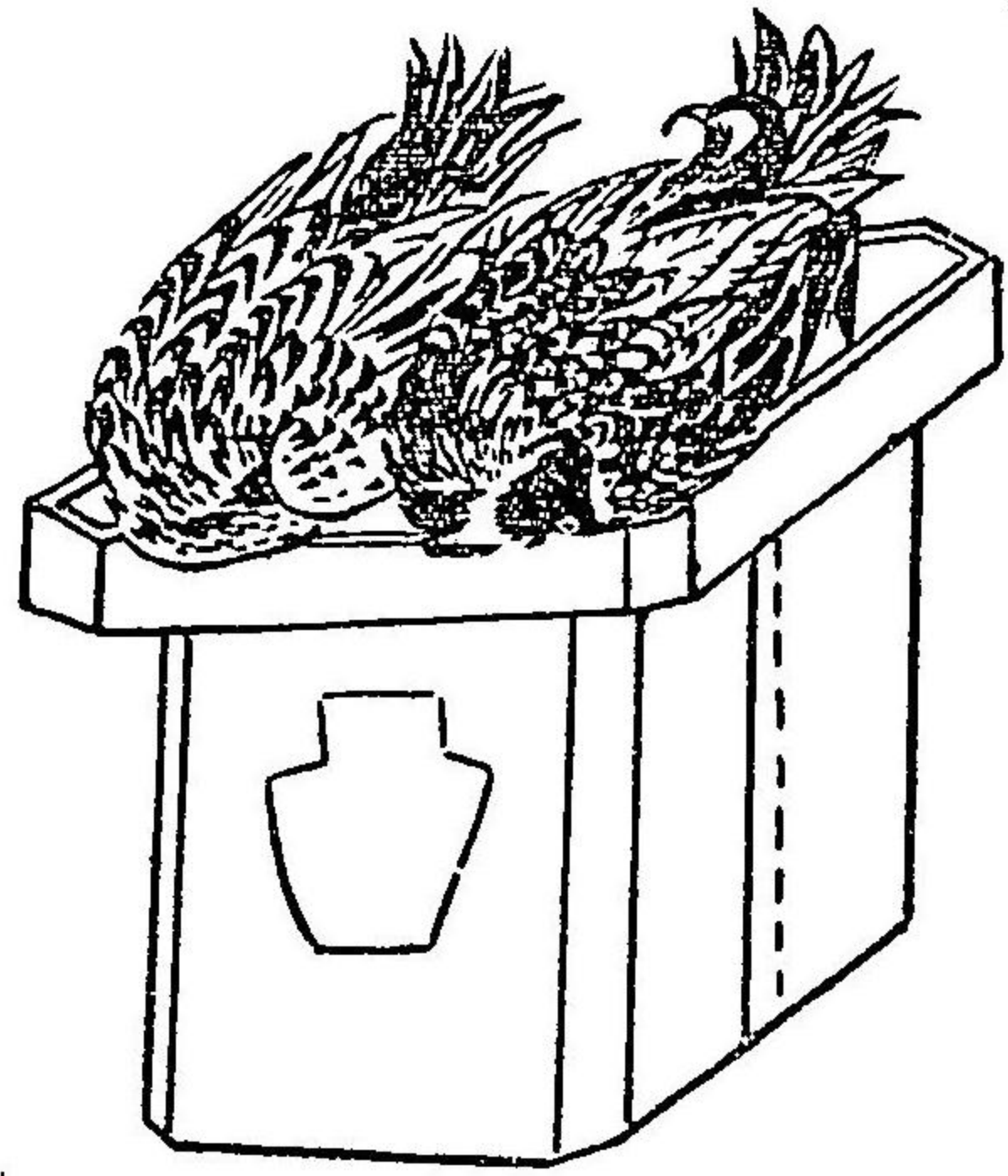
神饌四



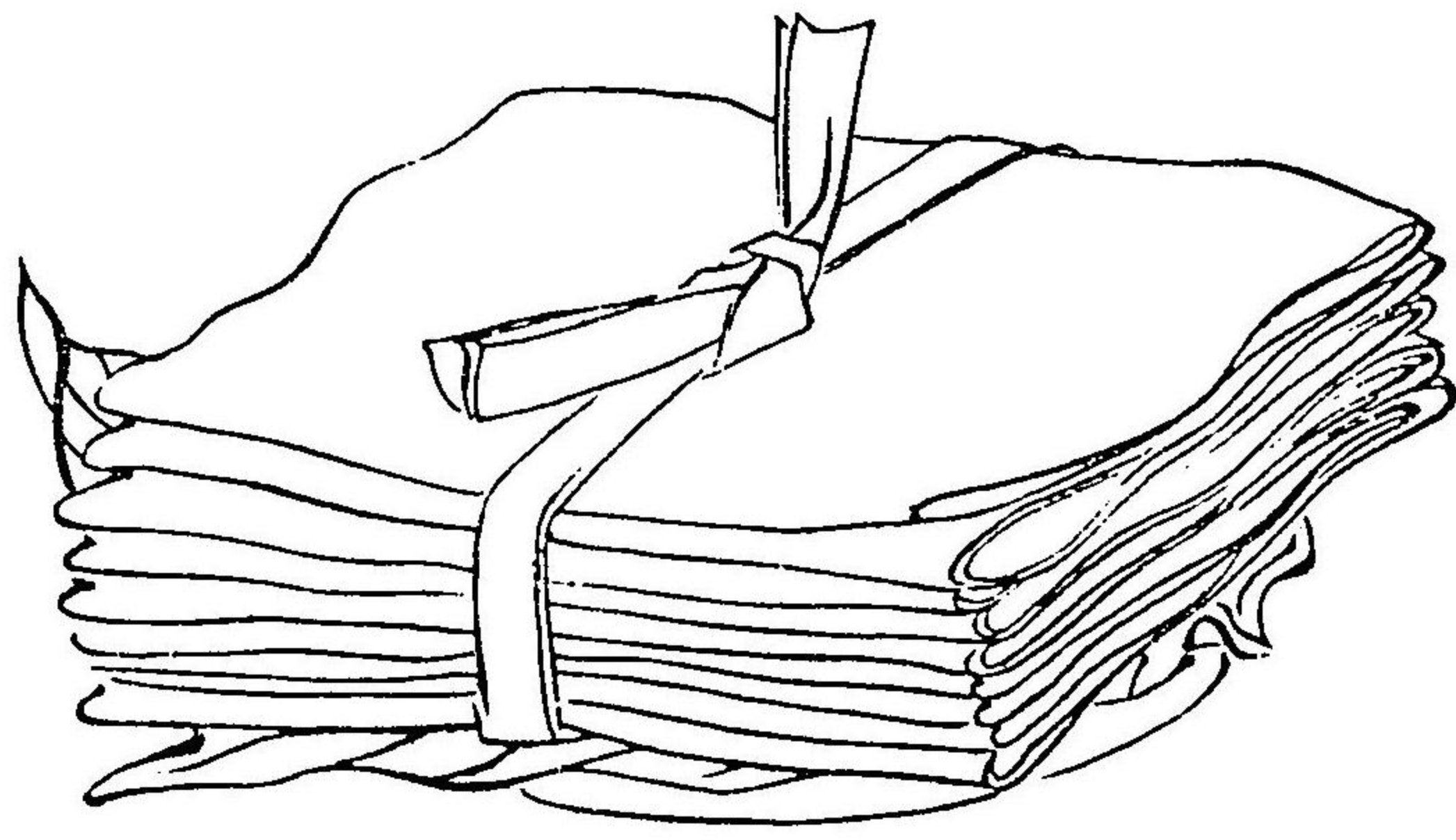
神饌五



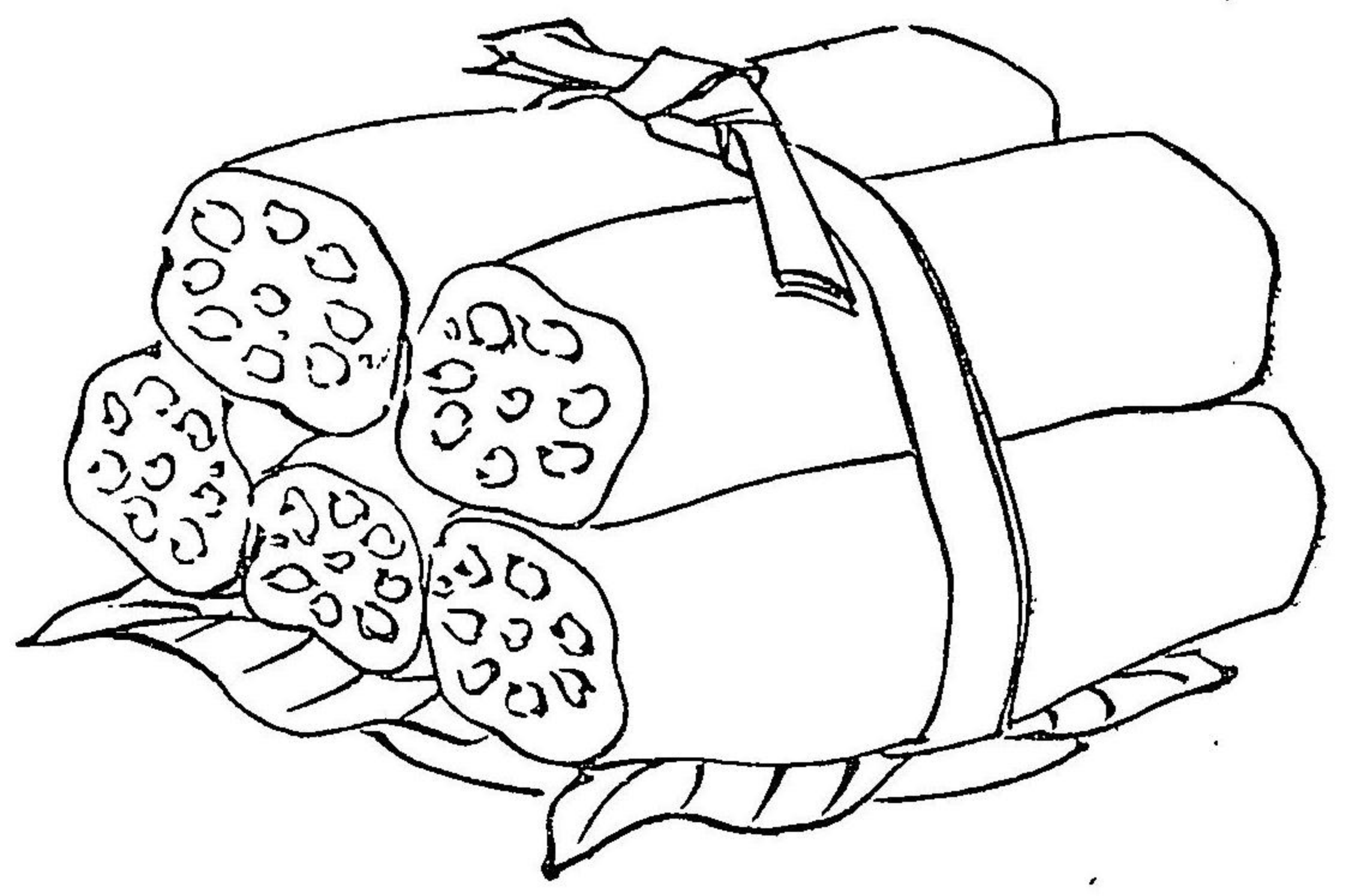
神饌六



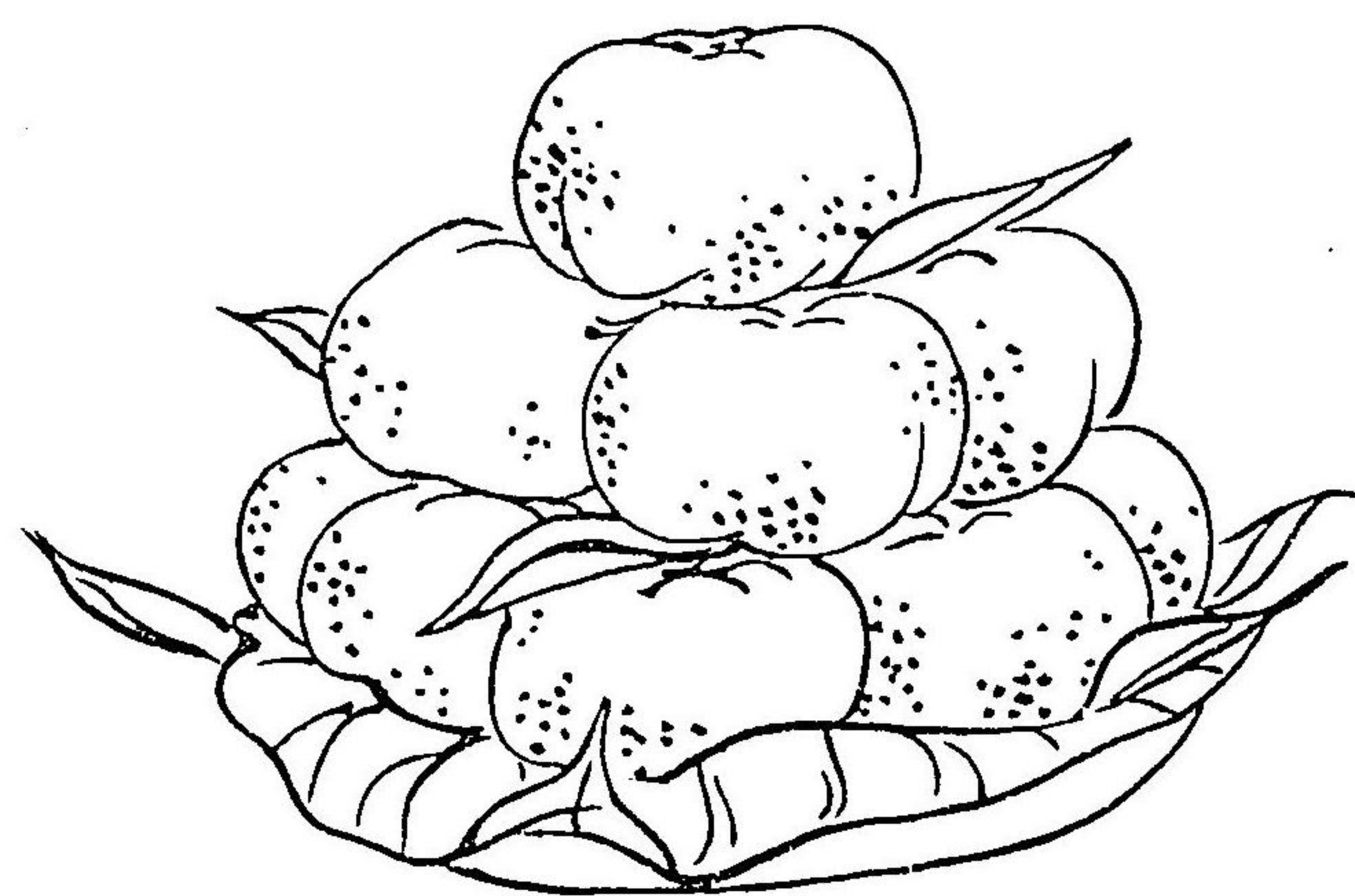
神饌七



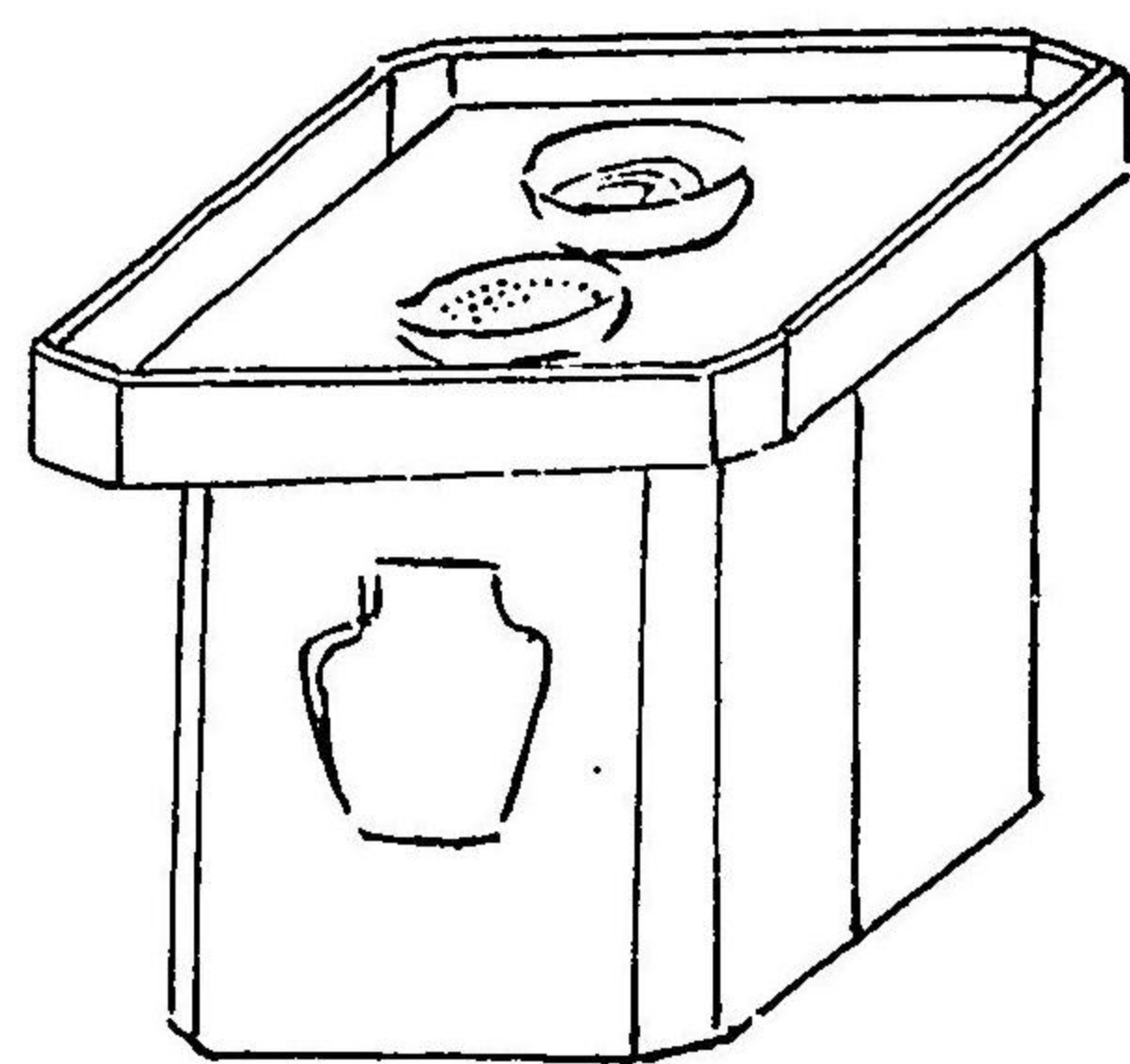
神饌八



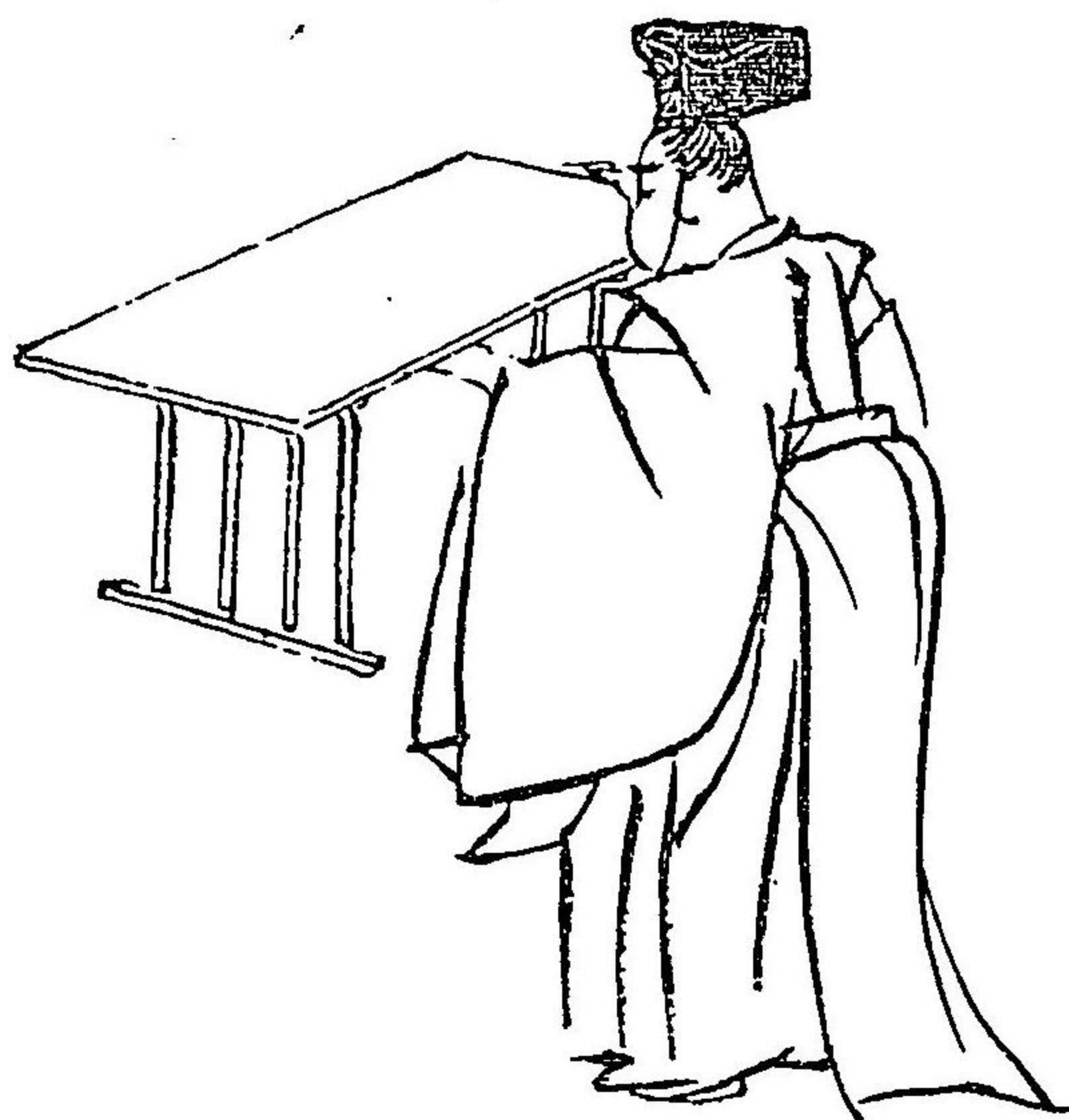
神饌九



神饌十



第十一圖



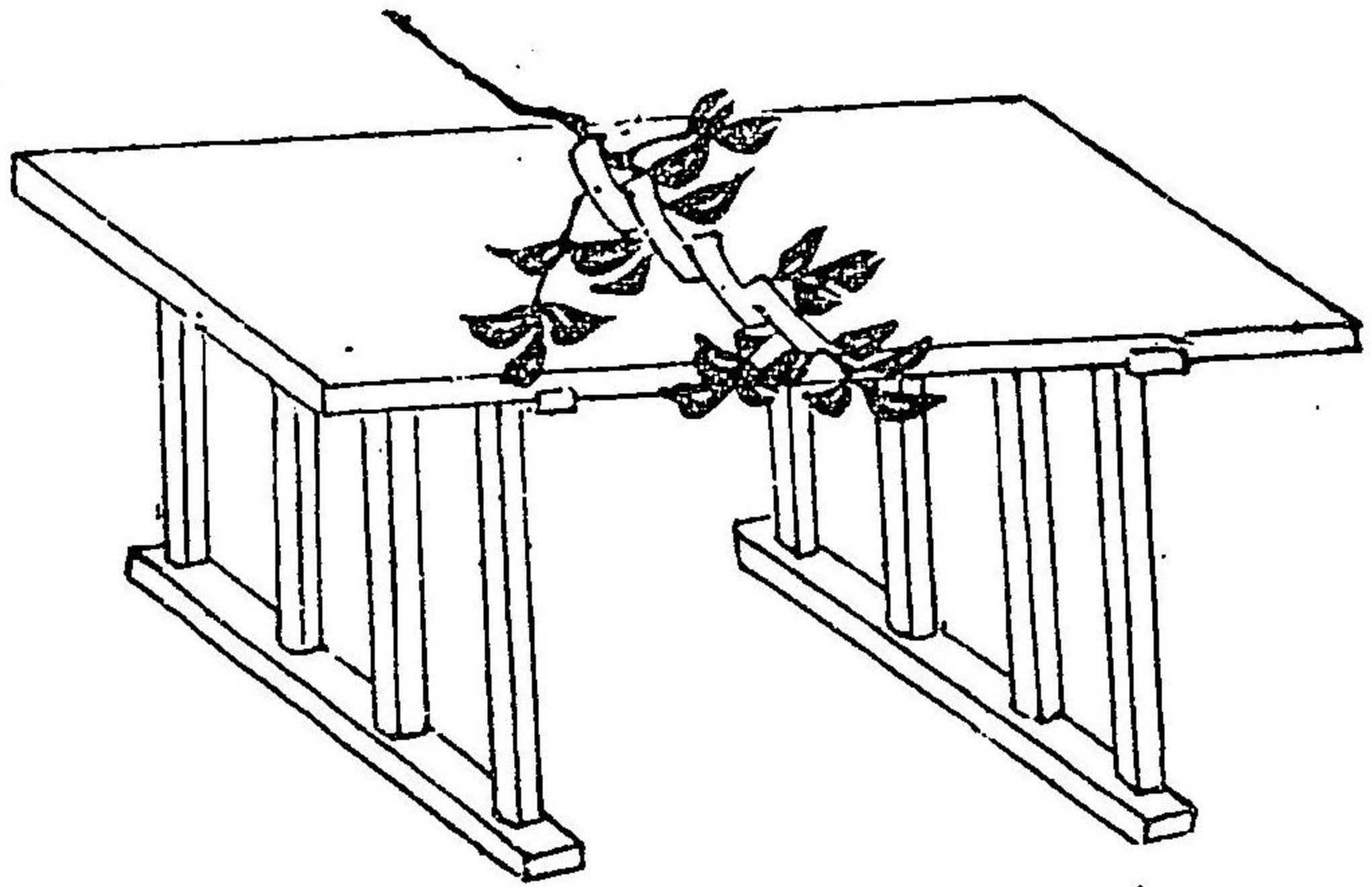
第十二圖



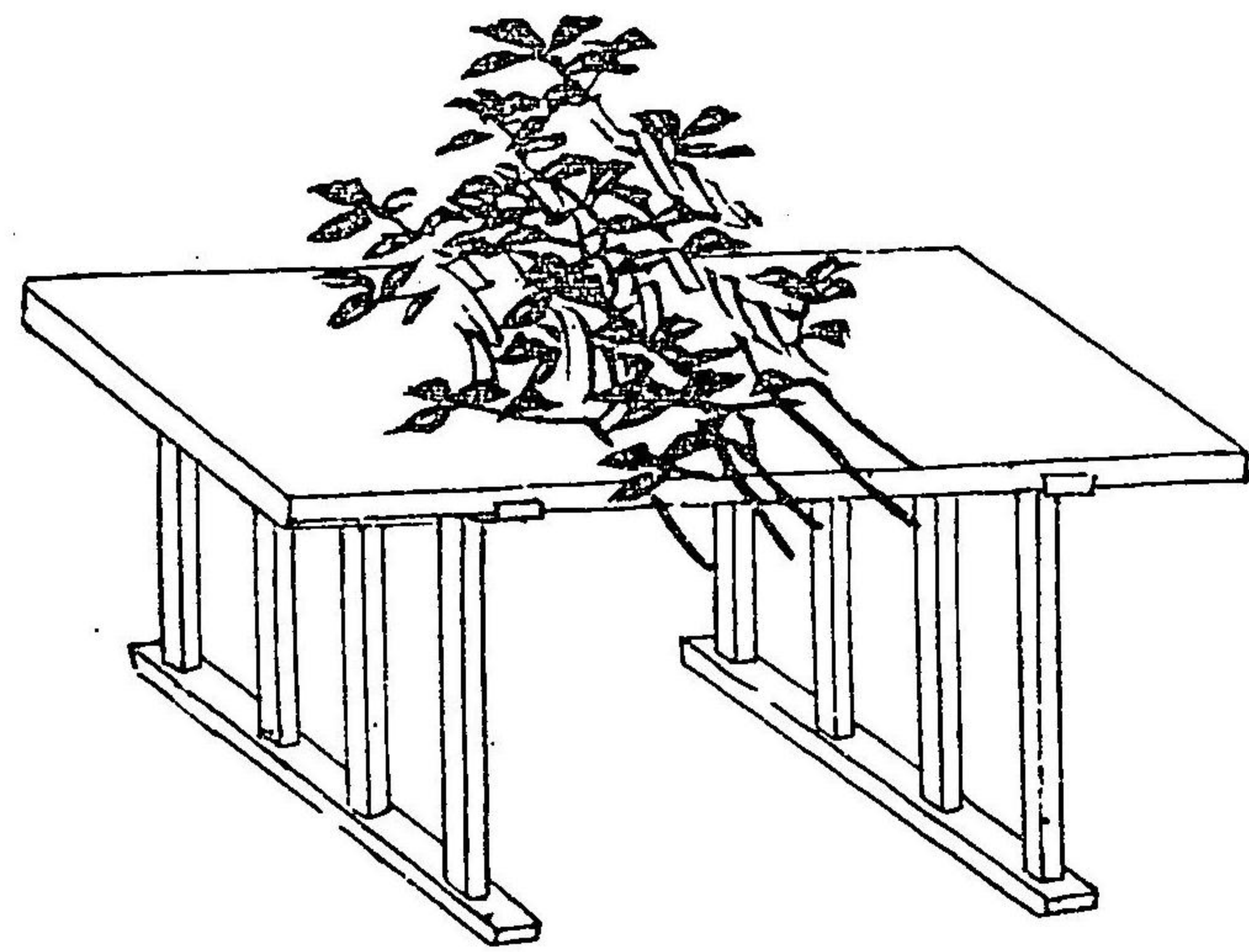
第十三圖



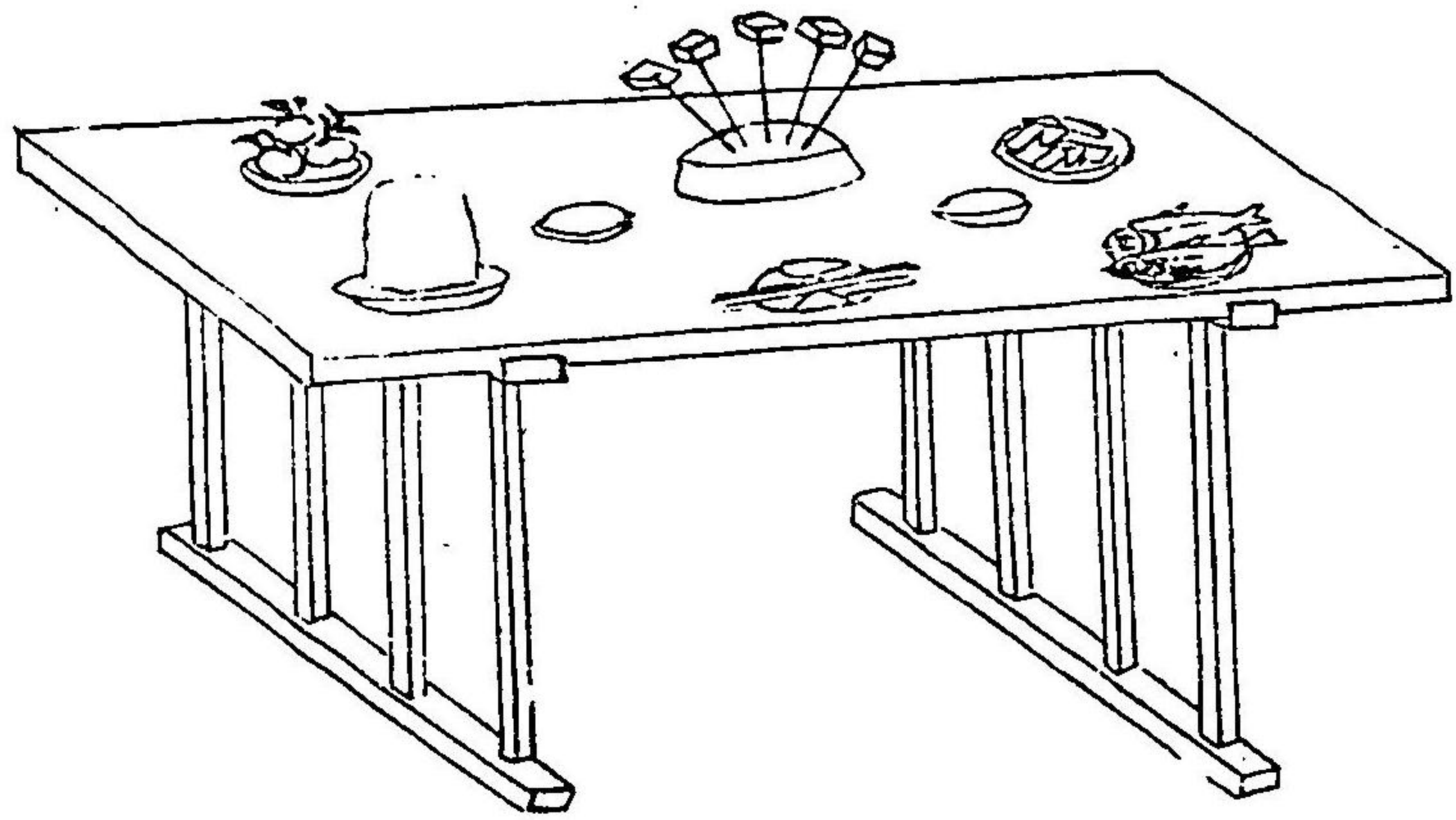
第十四圖



第十五圖



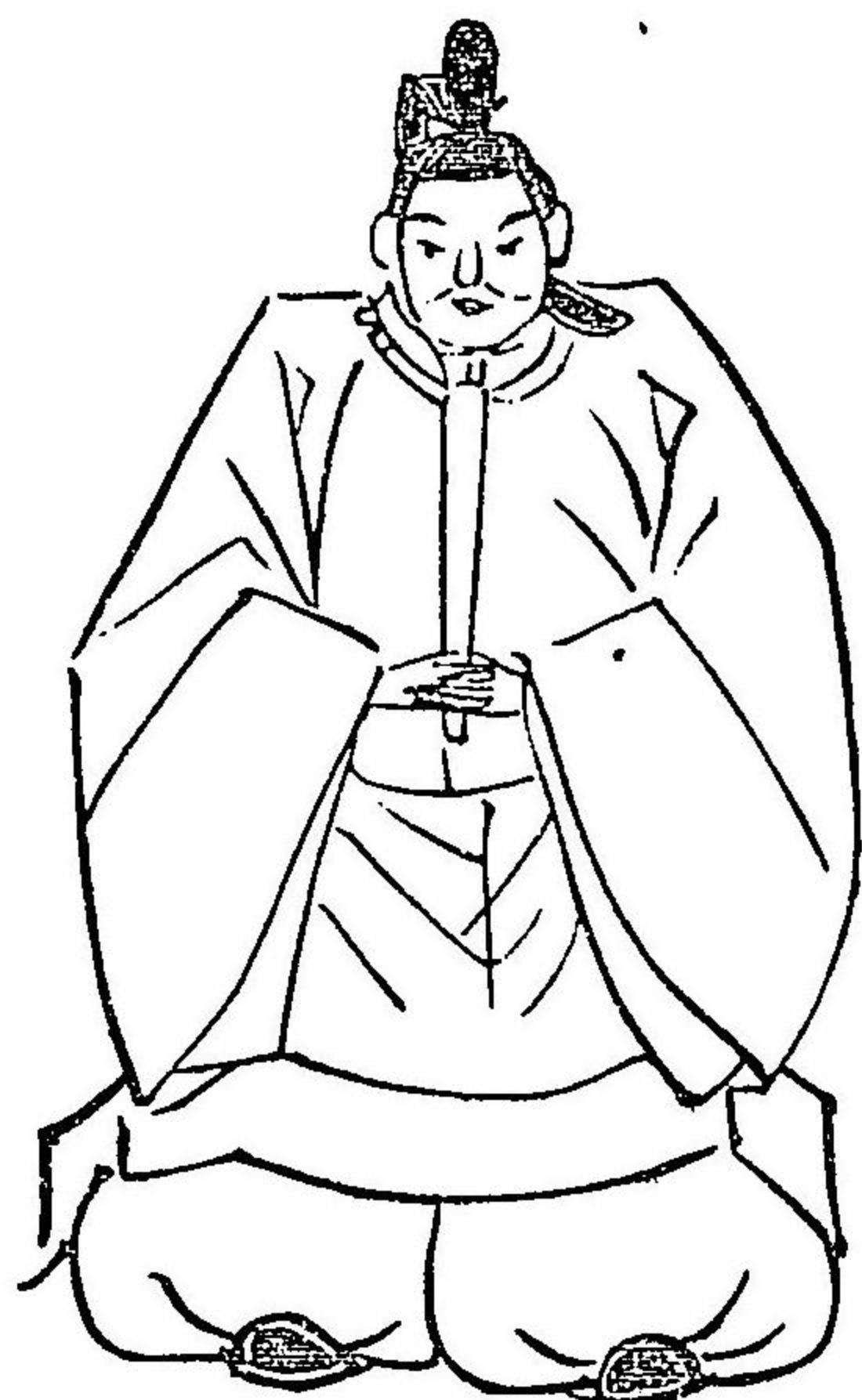
第十六圖

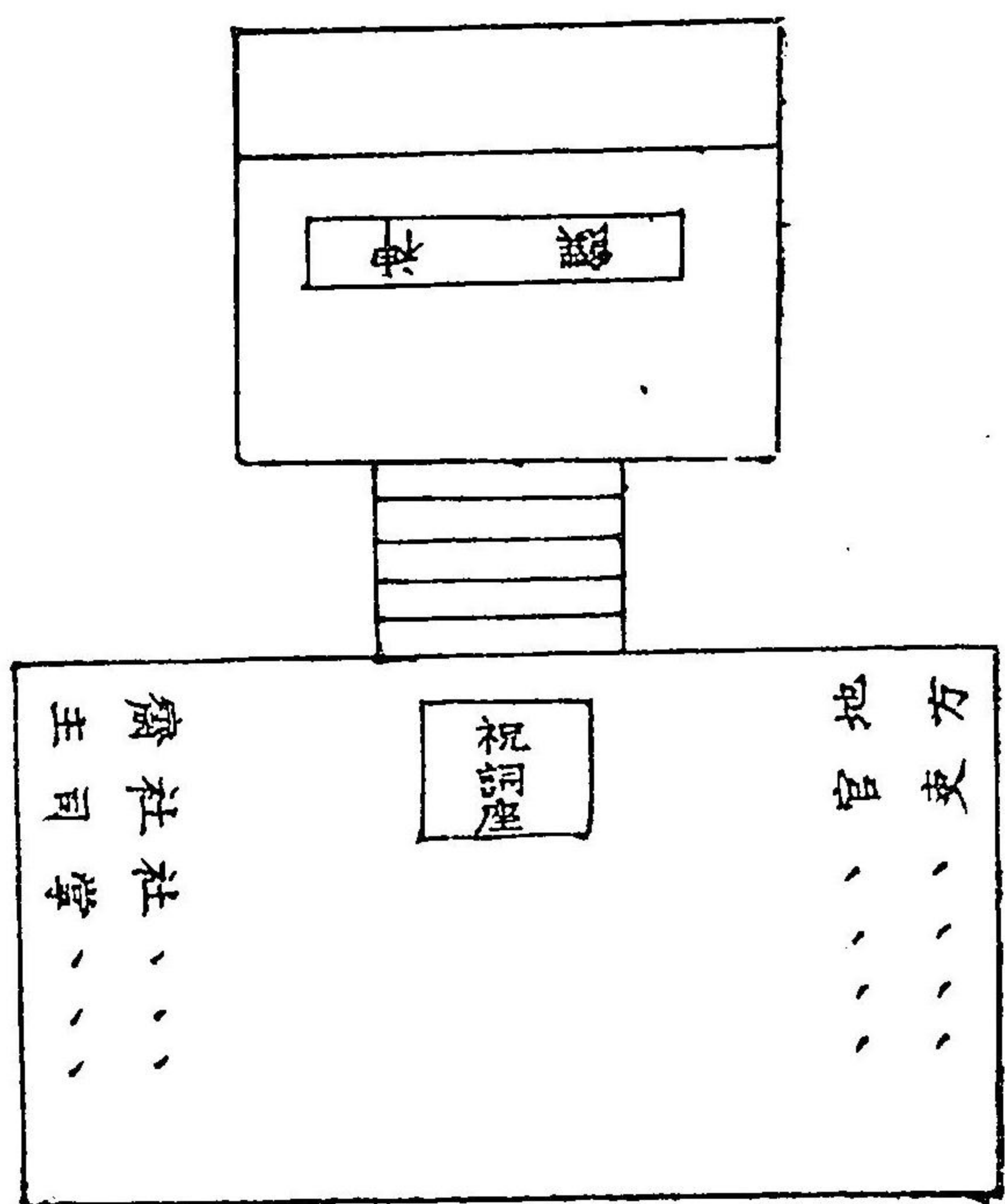


第十七圖

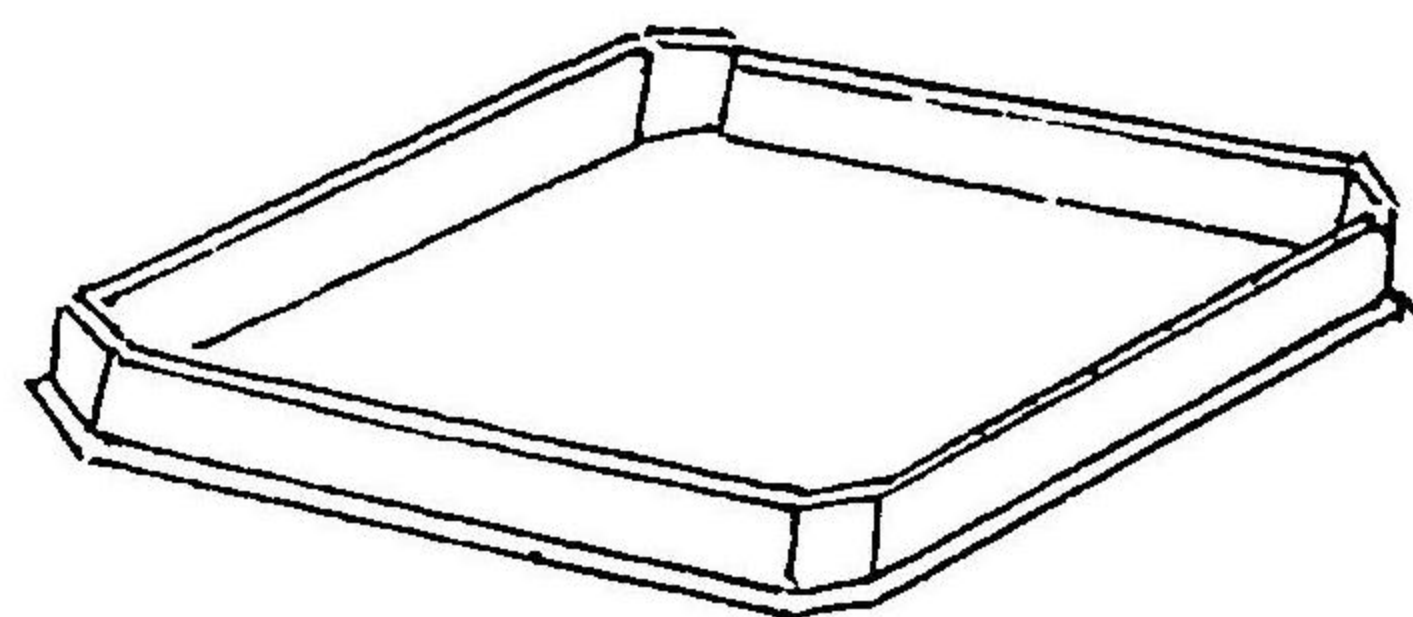


第十八圖

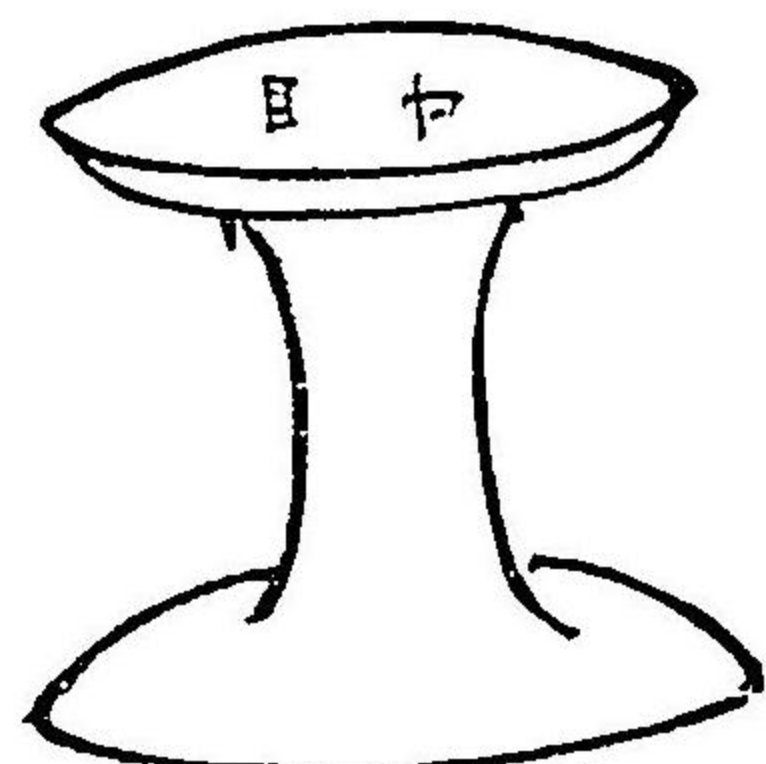




折敷
八寸五分
或八八寸



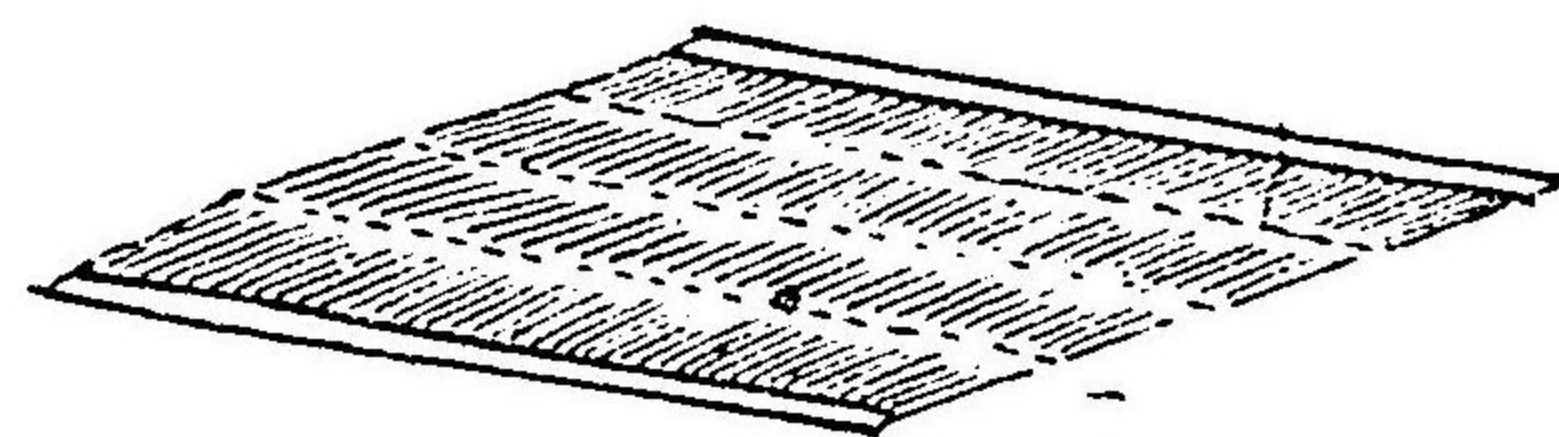
高坏



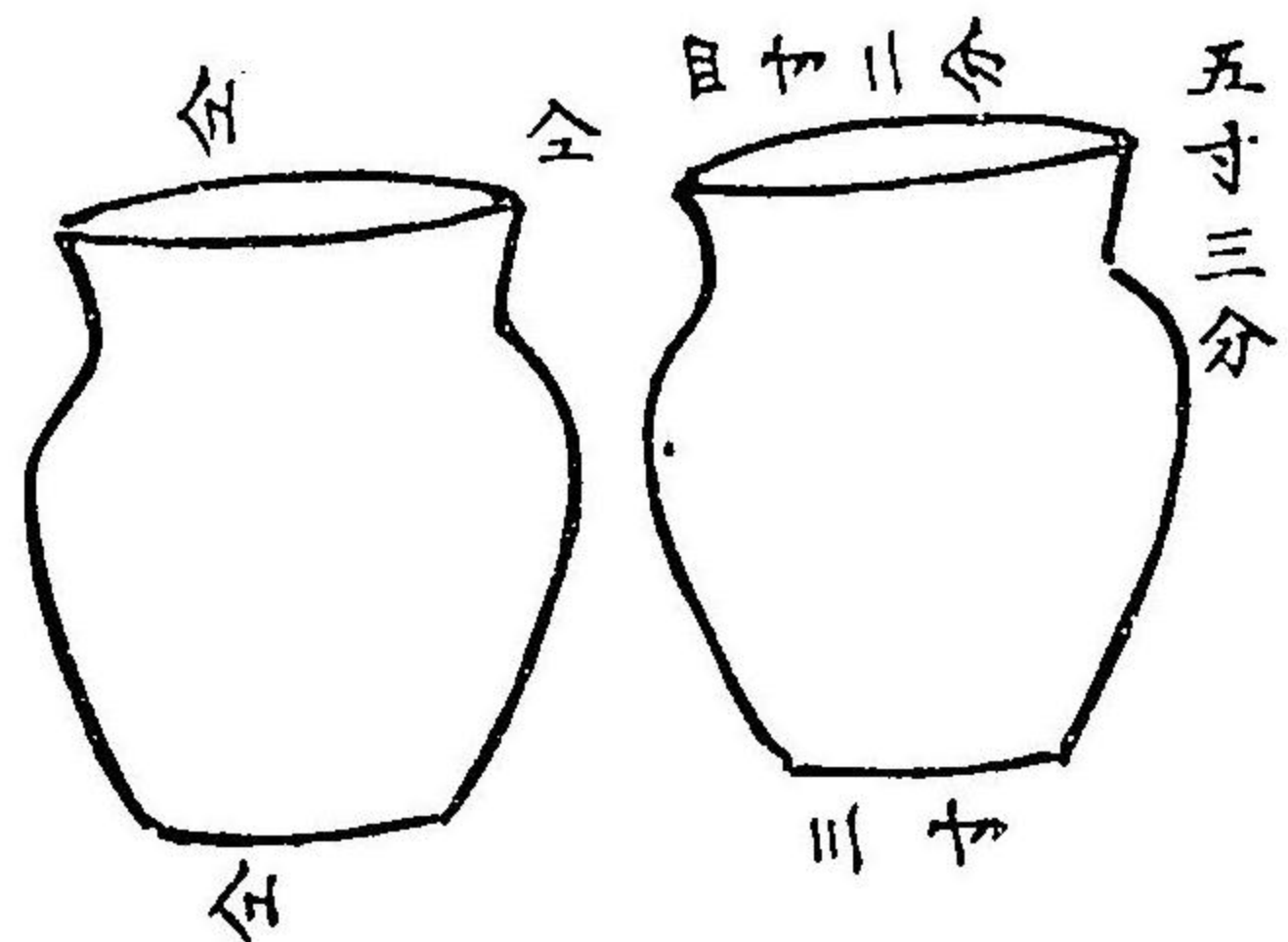
底目巾五分

軾トコ

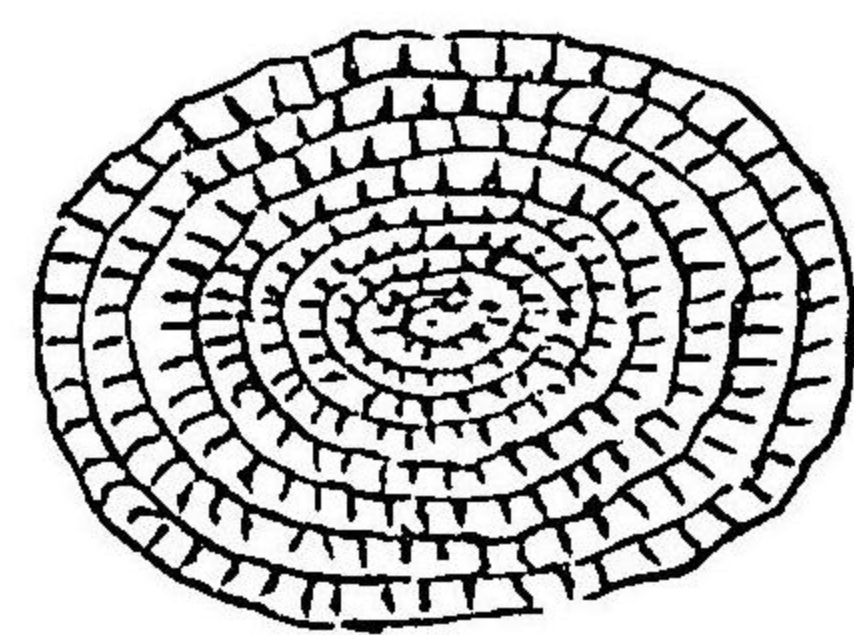
緑ハ白ノ麻或ハ
木綿ニテスベシ



一尺五寸四方



圓座
五寸八分



明治廿八年四月廿日印刷
全 年五月一日發行

定價金參拾錢

發行者

愛知縣縣社以下神職取締所生徒寮

愛知縣名古屋市古渡町二番地

代表者

鈴木信比古

全縣全市三輪町百二拾五番戶

印刷者

長谷部正宜

全縣全市門前町三百七拾三番戶

印刷所

原私堂

森

福三郎

